

平成十八年六月

ドウダんミン2

竹下
徹

まえがき

書き遺しておく、子や孫のうち読むものは読むだろうと思つて、体験や、思い、与論に関することを前回「ドウダンミン」の表題で本にした。かねて親しくしていただいている方々に恥を押し殺してお配りしたら、多分なお世辞をいただいた。「あんた暇だろう、もつと書け」と持ち上げる人がいた。「褒めれば豚でも木に登る」とはよく言つたものである。

与論の伝承、体験、思い、独白、時事に関して考えたことなど、つれづれに綴つた。長年教員をしていたので少年犯罪等教育的なものに目がいき、力んだ嫌いがある。

「ドウダンミン」とは、「ひとりよがりな考え」が一番近い意味である。カタカナ書きで与論語を多用してある。与論語の味わいを出し、多少なりとも伝えていきたいためである。

読んでクスリとしていただければ幸甚の極みである。

目次

イノー	3	ホーハイ	58
イユীগアマ	7	ムヌ(幽霊)	61
ソテツ(蘇鉄)	11	ウグミ	64
キジ(雉)	14	生	69
アバシ	18	心臓時計	72
サシ	20	又チ(命)	75
ハニ兄	23	尊厳死	78
ハタパギマンジャイ	27	人はだんだん死ぬ	81
マタバシコーヤク	29	丙子アグ	85
フガ焼き	33	脳に穴	88
薪	36	プリムヌ	93
位付け	39	災	98
イヤープジ	43	バランスの神様	101
トウンガ	46	ユートイーチ	104
正月豚	49	因果応報	108
ヌサリ	52	国の気概	110
三十三年忌	55	横文字氾濫	114
		メリケン	118

修身齐家治国平天下	1	2	3	無財の七施	1	8	2
悪人正機	1	2	6	我以外皆師	1	8	6
千手観音	1	2	9	鮪心	1	8	9
山川草木悉皆有仏	1	3	3	花嫁	1	9	2
太陽は神様	1	3	7	チヌパンチチャ	1	9	5
おてんと様	1	3	9	兄弟は他人	1	9	8
捨・拾	1	4	1	恒産なき者は恒心なし	2	0	2
人いろいろ	1	4	5	刷り込み	2	0	5
信	1	4	9	鳴	2	0	8
ひとの悲しみ	1	5	2	もつともだー	2	1	2
野次馬	1	5	5	豆腐	2	1	6
電池が切れた	1	5	8	蛍の光	2	1	9
少年犯罪	1	6	2	水訓	2	2	2
反哺の孝	1	6	5	生涯の恩師	2	2	9
戌・犬	1	6	8				
物差し	1	7	1				
天気予報	1	7	5				
チンダミ	1	7	9				

イノノ

夏、海にどぼんと飛び込み、浸るのは気持ちがいいものである。

梅雨時になるとシヌイ（もずく）がとれる。以前は大金久のクジリ一帯（真水が流れ込み、海水と混じり合うところ）に生えていたが、近年、ミナタやクルパナに広がってきた。八・九月になると白い菌糸みたいなものが表面につき、やがて消えてなくなる。スーナもとれる。ビューは葉緑素ミネラルたっぷりである。シピダ（海ぶどう）は、ピリツと辛みがありおいしい。沖縄で養殖し売られているものは与論のシピダより粒が極端に小さい。沖縄のものが小さなぶどうのデラウエアだとすると与論のシピダは巨峰にあたる。これらは海の野菜である。かつての枝珊瑚は、全滅し残骸が黒ずみ、砂に埋もれてしまっている。昔のイノノを知る者には驚きで残念である。

砂地の上にはテイララ（マガキ貝）がいる。三々五々散らばっていたり、夫婦でいたりする。たまに、ほんとにたまにだが、チヌムー又はガギモー（スイジ貝）が夫婦で見つかるときがある。獲物は海の神

様からの賜り物だと思われる。沢山とれる時はデイカチャン（でかした）といつてウブン（神様のお恵み）感に浸る。

アナグウ（シヤコ貝）もいる。口を開けシバ（唇・外套膜）を出して餌を待っている。そのシバが美しい。色があでやかで貝によつていくつかの色（濃青、緑、濃緑、金色模様、灰色模様等）がある。貝の内側は真っ白なものが多いが、黄金色のものもある。どのようにしてあんなきれいな色を作り出すんだらうかと神秘を思う。食べると貝柱は勿論のこと、内臓の白身はことさらおいしい。取り立ての生が一番。

ヒレシヤコ貝は、殻は大きいが中身は少ない。それに比べて石の中深く入り込んでいるジイアナグウは、取り出しにくいが中身は多い。ナマコは、与論では馬鹿にされるが都会ではメニユーの一品である。

シヤコ貝は小さいのから大きいのまで見ることができ、ガギモの小学生や幼稚園生に当たる貝をついぞ見たことがない。穴の中か砂の中に潜っているのだらうか。それとも外海で育ち、大人になつてから入ってくるのだらうか。粘膜を出して潮流に乗って移動する貝もいるという。テイララのことを大島本島では、「トウビンニャ」と言う

が、これは飛ぶ貝という意味で、實際海水面上を飛ぶそうである。飛ぶのを見たことはないが、その姿は想像できる。

取るのが面倒だが、マガイ（蛇貝）もおいしい。ほろ苦さが酒に合う。昔（少なくとも昭和二十年後半頃まで）は、ピシバナでギシユクン（琉球ヒバリ貝）がその名の通り、ぎしがたまりしていた。スープは、アサリやシジミのようにおいしかった。今は見たことがない。ウニも激減した。昔はウニの中身を取って瓶詰めにして出荷し、億の金を貯めた人がいるとまで言われたウニである。

ピシバナ（環礁・リーフ）は天然の防潮堤である。潮干狩りの場所でもある。ピシバナをはじめイノー（礁湖）は島の人々に多大な海の恵みをもたらしてきた。有史以来、島の人々の暮らしを支え、持ち上げてきたイノーである。近年、養殖技術も発達してきた。イノーは海産物養殖の畑になりうる。子どもたちが、我々のため豊かなきれいな海を遺してくださいと主張している。

有村喬翁は、生前国民の祝日として「海の日」を設定するよう働きかけ多大な努力をした人である。また海洋スポーツ少年団育成、活動

に力を入れ、海に親しみ、海を大切にすする思想普及に尽力した。今では、七月第三月曜日が「海の日」国民の祝日である。海洋国ニッポン、分けても海の中の与論、海洋民族与論、海を崇め奉りまおす。

我は海の子

一、我は海の子 白波の

さわぐ磯辺の 松原に

煙たなびく とまやこそ

我が懐かしき 住家なれ

三、高く鼻つく 磯の香に

不断の花の 香り有り

なぎさの松に 吹く風を

いみじき樂と 我は聞く

二、生まれてしおに 浴して

波を子守の 歌と聞き

千里寄せくる 海の気を

吸いてわらべと なりにけり

四、丈余のろかい 操りて

行手定めぬ 波枕

百尋・千尋 海の底

遊びなれたる 庭広し

平成十七年七月記

イユウガマ

旧暦六月の大潮になると、イユウガマが寄つて来るのではないかと血が騒ぐ。

男たちは、夜明け前にそれぞれの浜に集まり、西に寄るだろうか東に寄るだろうかと思案する。誰にも分かるはずはない。親方の判断に任せて出発する。偵察に海岸沿いの岩陰、ハンバラ（岩）の根っこを見て回る。イユウガマはピンク色をして群れを作っている。群れは大きなものもあれば小さなものもある。年によつてたくさん寄る年と少ない年とある。大きな群れは舟の上や岩の上から赤黒く見える。岩の上から見て回る人もいる。大きな群れは、「クムヌクリ（雲の群れ）」という表現をする。大きな群れを見つけたら、胸がダトウ、ダトウ高鳴る。

すぐに仲間を呼ぶ。仲間も興奮し、動作が速くなる。網をおろし、張り巡らせる。少しずつつ網の方に追いやっていく。これでよしっ！、と言うときには声をかけて一斉に潜って追い込み、網の裾を持ち上げ

て、一網打尽である。男たちは大きな息を吐きながら、イユウガマをかごに移す。イユウガマは銀鱗を輝かせ、小さいながらもピチピチ跳ねる。それは美しい、可愛らしい。男たちはそれを見て、漁獲の喜びと息を詰めた体が休まるのをおぼえる。

いつも一網打尽というわけにはいかない。潜ったとき、一人が遅れると、あたかも大穴が開いたようにそこから一斉に逃げていく。体長二センチそこそこのイユウガマだが、その逃げ足の速いこと、群れは一瞬のうちに消える。

イユウガマは年に一度の海の恵みである。ウシヤギム又、という。海に足を踏み入れるときに男たちは「チットートウガナシ、ウシヤギム又ウシヤギラチタバーリ（海の神様、海の幸を賜りください、お願い奉ります）」と祈る。昔は浜にいるみんなに分け与えられたという。塩漬けにしてパントウ（素焼きの大きな瓶）に入れて一年間のタンパク源にした。芋と食べると非常においしかった。豊漁、不漁は勿論であったが、現在よりは遙かに豊かであった。

イユウガマは、海草を食べる前は銀色に輝き美しく、味も良い。海草を食べるようになったものはクサパンと呼ばれ、体色は茶色っぽくなり、臭みを帯びる。成魚は、アイナー（アイゴ）と呼ばれる。アイナーは、身が引き締まり、刺身にしても焼き魚にしても、さらにピヤースー（酔の物）にしてもおいしい。三月三日の浜下りのときの獲物の定番である。ヒレには毒があり、うっかり指を刺されると腕の付け根のリンパまで腫れ、それはそれは痛いものである。しかし人によっては刺されてもどうもないという人もいる。前谷ヲウジャさんはその漁の名人だったが、刺されても平気な体質でもあった。

イユウガマは不思議である。どこで生まれてどこからやってくるのか。ウニンチュ（漁師）にあれこれきいてみたが分からない。旧暦六月の大潮の夜明けに、どこからともなく群れをなして、島の周りの海岸・岩陰にやってくる。

イユウガマは、琉球弧の他の島々では「スク」、「シユク」、「スルル」などと呼ばれ、なぜか与論だけ固有の名前がない。ドウダンミン男には遠い昔、夢の中か、おぼろか、「シユク」と聞いたようなもやもや

としたものがある。どなたかご教示願えればと思う。

平成十六年の夏、仲間の足手まといになりはしないかと思いつながら好きだから誘われるままに行つた。ゆ浜の港にイユウガマが入つていた。竹辰二を長とする私どものグループはそれをすくい上げた。久方ぶりの豊漁でまとめ市場に出した。二百キロ近くあつた。ある人が、「イユウガマは海の神様の贈り物だよね」と言つた。漁師は、ニライ・カナイの賜り物と感謝を捧げる。

南は与那国島から北は種子島・屋久島に至る南西諸島の海岸に、旧暦六月の大潮の夜明けに、一斉に押し寄せてくるイユガマの大群。どこからどのようにしてやってくるのか、それも知りたいが、あえて知る必要もない。ニライ・カナイの神様の贈り物と感謝して受け、いつまでもお恵みくださいと祈願マオースー。

平成十六年八月記

ソテツ（蘇鉄）

ソテツは、早魃にも台風にも強い。その強さは驚異的である。沖永良部台風（昭和五十二年九月九日、台風九号）のときは組み上げた鉄塔が飴のように曲がり、風速計は秒速六十八メートルを指してあとに吹っ飛んだ。そのとき風除けに身を寄せたのは、ソテツだったという。ソテツは断崖絶壁の岩頭で波しぶきをかぶってなお茂っている。樹勢が衰えたときに鉄釘を打ち込むとよみがえるところから、鉄でよみがえる（蘇）、「蘇鉄」という漢字が当てられた。

鉄を食って生きかえるというのも驚きである。なるほど鉄を食べるのだから、強いはずである。

自然災害の多い南西諸島においては、飢えを救う救荒植物である。戦後の食糧難時代には、ソテツがゆやムツチャー（ふくれ菓子）を作って食べた。おいしかった。

名瀬市の食堂で「ナリが湯」として出ていたので食べたが、思いつきの中にあるおいしさはなかった。あの当時は腹が減っていたから

に違いない。与論の諺に「ヨウシヤ ドウ マサ」とある。

ドウダンミン男の小さい頃、畑の周囲に蘇鉄を「植えなさい」と奨励していた。これは食料飢饉に備えるということとばかりではない。葉は緑肥になり、枯れ葉は薪に、根は空気中の窒素を固定して窒素肥料となる。防風垣にもなる。子ども頃は、葉で虫かごを作り遊んだ。実は葉として傷やニブトウ（できもの）に付けた。

先般栄喜久元先生（本町出身）が出版した「蘇鉄のすべて」という本の帯紙に、「琉球弧の奇蹟、ソテツ」、「飢饉を救った重要な食料になった。葉、土壌改良や肥料にも」、「琉球弧特産一属一種、億万年の命」とある。

与論における蘇鉄花の交配技術は、沖永良部から西田徳里が持ち帰り普及させた。それ以来収穫量が格段に増えたと、町田原長氏の著書にある。

盆栽として一時ブームになり、外国へ輸出されドルを稼いだ。そのため大木が乱伐され、今や激減した。

ソテツの実には発ガン物質が含まれているということ、一時敬

遠された。薬になるのは、一面毒でもある。その毒がある故に、蘇鉄には虫が付かない。自分の身を守る薬である。蘇鉄が干ばつに強いのは、水分を蒸発させない体の構造にもよるが、何より真ん中の芯に多量のデンプンを蓄えているからである。食糧自給率最低の日本国は見習うべきである。

ともあれ、かくも蘇鉄にこだわるのは、恩を感じ、特性を見直し、植えることを考えたらどうだろうかとドウダンミンしたからである。ビニールハウスで飽食の時代、笑われるのがオチである。

平成十六年四月記

キジ（雉）は神様

瀬戸内町の加計呂麻島に勤務しているときに、土地の人が「ハブは神様」というのを聞いて、ショックを受けた。猛毒を持ち嫌われもののハブと神様は私の中ではどうしても結びつかなかった。意味が分からず長い間その言葉はよんだままであった。

ある時、「人知を越えた超能力を備えたものは神様である」という本の一節に出合った。土地の人が猛毒ハブを神として恐れ、遠ざけてきたのが分かったように思えた。ハブのお陰で大島の深い山の森は、人の乱伐から免れてきたということも聞いた。なるへそ。

昔、名瀬市で、金網かごの中でハブとマングースの喧嘩を見せ物にしていた。マングースはハブの頭だけをねらってひとかみし、素早く飛び退く。ハブは釜首をもたげてマングースを打とう（かみつくことをこう表現する）とするが、空を切ってしまう。何回かの攻防がある。マングースの攻撃はヒットするが、ハブは空振り。ハブは次第に弱る。

マンガースは最後ハブの頭にかみつき離さない。ハブはのたうち回るのが押さえ込まれる。勝負あり。マンガースはもう平然と、一卷の終わりと言わんばかりである。この戦いにはインチキがある。ハブは夜行性で昼は目が見えないのである。

ハブ撲滅のために天敵であるマンガースを国の施策として導入した。しかし、ハブは滅らさず絶滅危惧種のアミノクロウサギ（国の天然記念物）を食い荒らしている。国はあわてて今度は、マンガース退治に乗り出している。ハブに感想を聞いてみたい。

キジで何を連想するだろうか。私は、真つ先に童話の「桃太郎の鬼退治」を連想する。桃太郎が猿、犬、雉を従えて赤鬼、青鬼を退治するのをわくわくどきどきして聞いた遠い昔がある。キジは空を自由に飛ぶ特性がある。桃太郎軍団における、今なら軍事情報収集をする人工衛星の役目を果たしたのだろう。

キジを与論島にもたらしたのは、有村治峯翁（名誉町民）である。

サトウキビの害虫バツタを食べ、食用にもなるために導入した。が、今では野菜をはじめ作物を食い荒らす害も目立つ。土中の芋まで掘って食べている。地下5呎の深さに埋まっている芋を察知する能力は何であろうか。ある人は匂いのように、と言い、そして「あれは神様だ」と言った。ほんとに不思議な超能力だ。

昭和三十年代の後半、与論にアフリカマイマイが入り、爆発的に増えた。ドウダンミン男がアメリカに行つて来ると言つたら、ハワイにアフリカマイマイの天敵である貝がいるそうだから、それを持ってきてもらいたいと役場から依頼された。ハワイの研究所でその貝をもらい受けた。羽田の入国検査を逃れるために、その貝を大事に紙に包みポケットに忍ばせた。鹿児島の旅館で与論の役場吏員にそのことを話して渡した。誰がバラしたのか、そのことが南日本新聞のコラム欄に載った。貿易検疫所から「新聞に載つたからには見逃すわけにはいけない。出頭せよ」と電話が来た。当時は沖繩が復帰前で、国境であつたために検疫官がいた。ドウダンミン男は「役場から頼まれてしたの

だ、やるなら役場を取り調べてくれ」と強く抗弁した。しよつぴかれるかと心配したが、沙汰やみになった。その貝、与論の寒さに耐えられずに死んだそうである。どうしたことか、あれほどいたアフリカマイもほとんど見かけなくなった。

アフリカマイマイは喘息の薬になるとか、食用になるとかで、わざわざ持ち込んだものと噂されていたが、誰が持ち込んだかは分からない。多大な害になったから、その人の名は分からないままでもよかった。煮て食べたという人がいたがおいしくなかったとのことだった。

イタチを与論島に導入したのは、林文治氏である。

サトウキビを食い荒らすネズミの天敵として期待されたが、効果のほどは定かではない。ネズミ算式の繁殖力を持つネズミに「イタチごっこ」というところだろうか。

平成十六年三月記

アバシ

アバシ（針千本）、ほんとに千本もあるだろうか、ドウダンミン男は数えてみたが、千本はなかった。大きくなると増えるのかと思ったが変わらなかった。針金よりも固くて丈夫なこの棘は、魚の鱗が変化したものである。棘は、野ざらしにしても腐らないので、捨てる場所が決められていて、「アバシ墓」と呼ばれる。動作はのろいが、この棘を恐れておそう魚はいない。皮を提灯風にふくらませて飾り物にした、ネズミよけにしたりする。小さいのは「シトウトウ」という。平成十五・六年、異常発生しているのを見た。

穴の中にいるのを銚で突くとたちまちふくれ、穴から引つ張り出せない。ちよつとしたことでふくれ面になるのをからかって「アバシ」という。娘は、「アバシ」と言われて益々ふくれる。アバシの肝臓が大きいことにちなみ、肝っ玉の大きい人を「アバシギム」と賞賛する。その肝の中には白い虫がたくさん巣くつていることがある。大きいだけに平気でいられるのである。なるほどザア「肝っ玉」。

「アバシドゥーシー（アバシ雑炊）」にして食べるとおいしい。ほかほかからだが暖まってくる。のぼせ下げの薬になるといふ。「アバシコーテイ プギ パギテイ（アバシを食べて陰毛がはげた）」と言ったりする。薬効の高いことを意味しているのであろう。「アバシ薬」といわれている。沖繩では高値がつく。アバシ漁を専門にして、沖繩に出荷している人がいる。

歯が強く珊瑚をかみ砕く。「シンアバシヌ クチカテイ テイネンナ（死んだと思われるアバシの口に指を入れるな。かみ切られる）」という戒めがある。何でも手当たり次第食べるから、どん欲にかきこんで食べる様を「アバシゴレ」といふ。大きいアバシは、棘を丹念に抜き、皮も食べる。それがまたムチムチしておいしい。

誰かアバシの養殖をする人はいないだろうか。大学に依頼して栄養価、薬効果分析させ、テレビに載せるとアバシブームが起こり、与論島がプーとふくれること請け合ひである。

「フヌ アバシ」とけなすことなかれ！けなす奴には針千本飲ーます。

平成十七年十一月記

サシ

サシ↓以前あったサシに似ているのでそう呼んでいる。正式和名は分からない。白いかわいい花を咲かせる。島中に蔓延している。このサシが蔓延したのは十数年来のことではないだろうか。

近頃、葉にとげのある大形のトウイユを見かけるようになった。これも蔓延する兆しがある。

終戦後の昭和三十年代、ヤハタ草が入り込み蔓延して大変だと、もっぱら農家の話題だった。当時は鍬でいちいち畑を耕し、ホウブシ、ノードキ、マヒヤー、ニビル、カタバミなど雑草を丁寧に取り除いていた。ヤハタ草は、球根の回りに小さな子ども球根がたくさんついていて、それが散らばり増えるので、手が付けられない感じだった。

ヤハタ草がどうやって入り込んだか分からない。種は、風に乗ってくるもの、鳥によって運ばれるもの、海流に乗ってくるもの、材木にくっついてくるもの等々ある。サシやトウイユはおそらく有機肥料の中に種が入って来たのではなからうか。新入種は、在来種を押し

のけて繁茂するものもある。植物種の生存競争である。

城の旧家の家の周りには、福木の大木が立ち並び古風な趣を醸し出している。これは防風・防火・用材として移入されたが、最も古いものでも二百年そこらであろう。

アカギの木は成長が速く、短年で大木になるが成長が速いだけに枝は弱く、台風のたびに枝が折れる。

アレカ椰子を観賞植物として、昭和四十年代に武東範成、佐藤持久氏など島外有志が出資して数千本の苗を購入配布した。現在四く五メートルの高さに成長し、各地で亜熱帯性の風情を醸し出している。

与論島がもとは海底だったことを考えれば、ウシク、ガジマルなど今ある全ての動植物が、外来移住種と言うことになる。

数年前から台湾ヤスデが入り込み、異状発生して、人々を悩ませていた。それ以前は、台湾カブトムシが椰子の若芽を食い、枯らしてしまつた。今また、みかんの木につく柑橘グリーニングが問題になつていいる。私の家では、トウドウムシヤ（ヤスデ）が座敷を我が物顔にはい回り、布団にまではい上がってくる。

金明竹の根回ししてあるものを買ってきて植えたが、二度とも枯らしてしまった。よほど土地が合わないと見える。

招かざるものが入り込み、繁茂するものがあるかと思えば、なかなか育てられないものもある。

アフリカでエイズが発生すると、ジェット機がそれを運び、たちまち全世界に広がる。中国で鳥インフルエンザが発生すると、ひと月後には日本に伝染し、卵の値段が上がる。今では海は何の障壁にもならない感じになってきた。　ハアークツチャメー”

平成十六年四月記

ハニ兄

ハニ兄は、ウニンチュ（漁師）とは言い難かったが、かなり達者で海好きだった。ドウダンミン男は、内・外海ともによく連れて行ってもらった。三月三日の家族の瀬渡し、旅から人が来たときの海遊び等々幾度となくお世話になった。

外海では、ピン（昼）ナガリやユ（夜）ナガリをした。いずれも碇を下ろすときと下ろさないで漂って釣るときがある。ピンナガリでは、ムリユウ、パナンタ、ネバリ類、ベラ類など種類が多かった。魚の種類によつて住んでいる場所（スニ）がだいたい決まっています、ハニ兄はそれを熟知していた。あそこに行つてムリユウを釣ろう、パナンタが連れるのはどのあたりなど。風向き、潮の流れ、潮時を勘案して場所を決める。それが漁の出来・不出来に直結する。

ヤマトイウ釣りに連れてくれた。赤崎の沖だった。ハニ兄の指示で碇を下ろし釣り始めた。釣れる、釣れる、入れ食いだった。同時に二・

三匹釣れるときもあつた。食いがやや止まった頃、碇綱を引き締め
てごらんという指示があつた。綱を引いたら碇が上がつた。ドウダン
ミン男は、再び下ろして海底に碇を付けて固定した。その間わずかに、
舟が移動したようで、全く釣れなくなつた。碇綱を締めたりゆるめた
りしたけれども駄目だつた。ハニ兄にきつく叱られた。ヤマトイウ
の巢穴は口のくびれた水瓶のようになっていて、糸を垂れる口が狭く、
ポイントをはずしたわけである。男は釣れた分で大漁だと思つたが、
ハニ兄は大不満だつた。申し訳なかつた。

カマス釣りに行つた。カマスのスニは与論島の周囲にあるらしいが、
ハニ兄にはたいてい品覇沖に連れて行つてもらつた。兼母の先と沖繩
のとさか岩を一直線で結び、与論島を目印に当て、水深は百五十呎か
ら二百呎ほどの所を定める。碇は二十キロほどの石で、帰りは引きち
ぎつて捨てられるようにわら縄でくくつてある。しかも一つしか持つ
ていけないから、一発勝負である。はずしたら、漁獲も当てはずれで
ある。ハニ兄は一度もはずしたことはない。

イカ釣りは碇はいらない。波のまにまに揺られながら釣る。時期に

は広い海一面イカだらけではないかと思われるほどいる。イカはロケットのように噴射して泳ぐ。ロケットのようにとはイカに失礼で、イカのまねをしたのがロケットである。普通の魚は水面をたたくと驚いて逃げるが、イカは逆に寄ってくる。引きも結構強い。泳ぐのも後ろ向きである。昔は、黒墨と一緒に塩漬けにして一斗パントウ（素焼きの瓶）に詰め込んで保存食にした。芋と相性がよくおいしかった。

イカ釣りのあげく、夜が白々と明けてくると、イカを引っかけて、ソーラ引かしである。今は浮き魚礁の周りを回るが、昔は大海原を当てもなく走り回った。大物がかかるときは、走っている舟が引き留められるほどの衝撃があった。かかったらエンジンをスローにする。

ハニ兄が、私にサワラ釣りの醍醐味を味あわせるために、サワラのかかったロープを渡してくれた。強かった。引いているうちに急に引きがなくなつた。私が「アッサーはずれた」と言ったら、ハニ兄は「そんなはずはない、引け引け」と言った。しかしもう後の祭りだった。ハニ兄は「はずれるような掛かり方ではなかつた。カチツとかかつた。あんたのひき方が遅くて、逆に突き上げてきてはずれたんだ、チュム

「チヨイ」と言った。ハニ兄は手応えで分かっていたのである。めったにありつけない獲物だったので、ドウダンミン男は恐縮千万だった。ハニ兄は、かねては優しいが海の上ではとても厳しかった。「包丁」などと言うと厳しく叱られた。海では魔物よけの言葉が違ふ。

黒雲が遠くに見えた。魚が釣れておもしろいときだった。ハニ兄が「碇を上げろ」と言い、私が「又ガ？」と言ったら「黙ってやれ」と叱りつけられた。帰ってから「黒雲の下は風だからだ」と言った。そして「ピチュヌ 男の子を預かっては」とひとりごとを言った。ひとの子を乗せていて遭難でもしたら、ということである。優しさ故の厳しさである。

そんなおいらのハニ兄。不治の病にかかり、平成十六年六月二十日他界した。数多くの網を専用倉庫にかけたまま、サバニも残したまま逝った。ドウダンミン男も暇になったし、海に連れてもらいたかったのに、残念である。何より残念であったのはハニ兄だったに違いない。ハニ兄、ミッシークトオトウガナシ。安らかにお眠りください。

平成十六年八月記

ハタパギマンジヤイ

ハタパギとは一本足の妖怪である。ウシク（アコウの木）の大木や岩穴に宿り、夜になると灯りをつけて海を歩く。一本足なのでトウンジヤイトウンジヤイ（ケンケン）して歩く。イシャトウとも言う。

夜の海でイシャトウに出会った話は、大人たちからよく聞いた。砂浜で「これがイシャトウの足跡だ」と見せられたこともある。海でイシャトウの悪口を言うといひどい仕返しをされると聞かされ、大人になっても口を慎んでいる。

イシャトウは魚の目玉が好物で、タコが苦手らしい。イシャトウに食べられて目玉がない魚の話は何回か聞いた。イシャトウの気配を感じたら「タコだ」と大声で叫ぶとイシャトウは逃げ出す。また、「糞、糞臭い」と言っても逃げると言われる。

海から帰ってきて、「ハタパギだった」と言えば魚が捕れなかったことを意味した。中学生の頃、海に行く人に、片足を持ち上げて「ハタパギ」を示す悪ふざけをした。海に出かける人にとってこれほどいや

なものはない。まともに怒る人もいた。

主人が外海に出かけた後、妻が家で髪を洗ったり、ヘークジー（長持ちの中をあさること）はタブー（厳禁）とされている。なぜ縁起が悪いのか。髪はノーガチブル（魚を釣るひもがまつわりつくこと）につながる、ヘーは棺桶を意味するから、とドウダンミンした。

昔、クルパナの海で漁をした人が、魚が捕れなかった腹いせに、海岸をちよつと上ったところで、海に向かって罵声を発した。その人はアーピヤー（地名）まで来て倒れて息絶えたという言い伝えがある。

海では海神にさわる言葉は禁忌である。用語も特別なものがある。海は命の源、多大な恩恵をもたらすが、間違つたら命を落とすこともある。俗信、迷信と笑うことなかれ、敬虔さはウミンチュ（海人）の身上。

平成十七年十一月記

マタバシコーヤク

このタイトルでどきつとする人は、続けてお読みください。しない人は、後学のためにお読みください。

この言葉が分かる人は古い人である。ズボンやジーパンの当世では死語である。ダイエツト、ハリタバシ（やせつぼち）を賛美する当今である。勿体ぶらずに言うと、相撲取りが片方の股に軟膏を塗ると、歩きたびに交互につくことを言う。どっちにもつくことから、こっちの人がこう言うところちに賛成し、あっちの人がああ言うところちに賛成する、そんな人を侮った言葉である。

昔、哺乳類と鳥類が戦争をした。コウモリは哺乳類が勝ちそうになると哺乳類を応援し、鳥類が勝ちそうになると鳥類を応援した。やがて戦争が終わった。コウモリが哺乳類の所に行ったら、君は鳥類の応援をしたではないか、「あっちへ行け」と追い出された。鳥類の所に行ったら、君は哺乳類の応援をしたではないか、「あっちへ行け」と追い出された。両方からはじき出されたコウモリは、仕方なく岩穴の奥深

く入り、コウモリとなった。罰が当たり、目はつぶれ、懺悔のために逆さまに寝るようになった。お釈迦様がそれでは可哀想だということに耳を發達させ夜自由に飛び回れるようにした。

《コウヤク（膏藥）》

「膏藥と理屈はどこにでもつく」と言われる。

オウム真理教が、地下鉄サリン事件などの犯人ではないかと疑われているときに、メンバーの一人である「上裕」は、追求の質問に悪びれるところもなくのらりくらりと言葉巧みに逃れた。後に、「ああ言えば、こういう上裕」と皮肉られた。

「沈黙は金」「腹芸」など寡黙が重んじられた日本の昔風は疎んじられるようになってきた。国際社会で生きていくために、学校で「ディベート」なる訓練さえする。これは極端なことを言えば、討論で相手をやりこめる力の養成である。いい意味で言えば説得力である。白を黒と言いくるめ、それでも勝つたら勝ち、というドライなものである。なんとか討論を聞いていてその感を深くする。どこにでも、何とでもつく理屈。

「理屈と膏藥はどこにでもつく」というのは負け犬のセリフ。
「義を言うな」で育った薩摩武士は、今は昔の化石となる。

アドウイク

「アドウイク」とは、やせつぼちに対する哀れみを込めた与論語である。腹が出たのをワタブタという。ワタブタは侮蔑や憎しみを込めて使われることが多い。私が子どもの頃のワタブタは、食糧難にあえぐ国の子どものようにやせていて、腹だけが膨らんでいる格好だった。悪戯っ子に言うこともある。ワタは腹、ブタは豚。腹が豚みたいによぶよぶ大きいのでそう呼ぶのだろうか。近頃ワタブタ大人が増えた。私めもそのひとりである。

一昔前、「コイタル（太っている）」と言えば豊かさを意味し、尊称だった。「ドウジユウギヤ」は、太っていて強そうだという男へのほめ言葉で、言われた本人も喜んだものである。

今、女性に「コイタル」と言おうものなら大変である。「やせたね」と言えば喜ばれる。ダイエツト食品、運動器具産業花盛りである。テ

レビでやせる方法の宣伝のない日はない。一方料理番組のない日もない。グルメ時代ともてはやす。

食べるものがなく、仕方なく痩せていた時代は、太っている人を見ると健康的でうらやましかつた。今は飽食の時代、たらふく食べて太る。「太り」に対する見方が逆転してきた。

ドウダンミン男は、ワタブタで医者からイエローカードを出されている。食事に気を付け、運動をしなさい、と。なのに、たらふく食べ、汗を出さない。食いしん坊で怠け者。これじゃ太らないわけがない。命長らえたければ、食わずに運動すればよい。運動はなかなかできないから、食べたいのを辛抱する。食いしん坊を食い辛抱すればよい（ニヤツとした人は頭のいい人、しなかつた人は同類）。分かっちゃいるけど止められない。

ダイエット食品は、食べると痩せるというイメージがある。だまされてはいけない、あくまでもそれ以上太らないということであって、痩せるということではない。ご存じでしたか。失礼しました。

平成十六年秋

フガ焼き

小学生の時（昭和二十年代）、家庭訪問でいらつしやる先生のために母がフガ焼きを作った。しかし、先生は召し上がらなかつた。次に組まれている家に道案内をして付いて行くと、その家でも大きなフガ焼きを作つて待つていた。トウラ（私の幼名）は、先生になつてあの先生、あんなに美味しいフガ焼きを食べないなんてヨーニヤ（馬鹿だなあ！）と思つた。

八百屋の一人娘〃お七〃が恋に身を焦がし、彼氏に逢いたいばかりに自分の家に火を点ける。フガ焼きを食べたいために、病氣にならんかなあ！ と、八百屋お七にも似た思いが起きるときがあつた。

昔は、卵は貴重品で藁フブキ（筒状）に包んで旅の土産にした。Aコープで十個七十円で安売りされているのに世の変わり様を思い知らされる。同じ年頃の友人が、あきるまで卵を食べてみたくて、ゆでて食べた。三十個までは食べられたが、それ以上は鳥の糞の匂いがし、

臭くなくなって食べられなくなったと語った。

先生になったトウラは、親戚の家の茶飲み話で、茶目つ気を含めてフガ焼きが先生になる動機だった、と話した。後日行くと、大きなフガ焼きを出して、「フガ焼きコレチャサヌドウ（食べたくて）、先生になつたそうだから食べなさい」と言われた。思わず苦笑した。次回行つたときもまた出た。もう、なんと申しましようか・・・

鹿児島で学生寮生活をしているときに、腹が減ると伯母の所に行つた。伯母は四畳半の一部屋を与えられ、紬織りをしていた。私が行くとご馳走をしてくれた。大根の切り干しに醤油をかけたのが出た。甘みがあつてとてもおいしく、「おいしい」と言つた。そしたら次もその次も出た。こんな時なんと言えばいいかしら・・・

ある人が、ご飯の焦げを「おいしい」と言つたら、次からわざわざ焦がして、そればかり出されて閉口したという話をしていた。同じ体験に笑つた。

食べ物のあまりなかつた戦中、戦後育ちのトウラは、食べ物のえり好みはしない。食べ残して捨てるのは罰が当たると思っている。何を

食べてもおいしい。ご飯も卵焼きもたらふく食べられてほんとに有り難い。その気持ちは、食べたくても食べられなかった過去があったからである。「ヨーシヤドゥ マサムヌ（腹ぺこがご馳走）」飢えも有り難いものである。育ち盛りに腹一杯食べていたら、身長も体ももつと立派になっていただろうにと、時々愚痴る。息子にはいつぱい食べさせて、身長180以上の大男にしようと思つて「食べなさい、食べなさい」と勧めたが、食べてくれなかつた。

フガ焼きは、トラウマ（精神的外傷）にも似た形でトゥラの心にナンジキ（焼き焦げ）になつて今も離れない。

平成十七年正月

薪

トウラ（私の幼名）の家は貧乏だった。幼少期、トウラは「薪と水」に苦勞させられた。薪を取る土地がないために、道に落ちている薪を拾い集めるのが日課だった。片手いっぱいになると道端に置き、進んでいく。適量集まった頃、引き返しそれをまとめて担いで帰る。子供心に惨めだったのは、薪を取る自分たちの土地がなかったことである。裏返せば隣はいっぱいあつてうらやましかった。

客があつた。祖母がお茶を沸かして持ってきなさいと言つた。少年は前の田圃からマイグル（稲を刈つた後に出てきた若芽）の葉を切つてきて、お茶を沸かした。当時はそれが茶の葉がわりだった。少年は、完全に沸騰させずにお茶を出した。客が帰つた後「生煮えだった」と祖母に叱られた。少年は薪をケチつたのである。少年は、「生煮えだ」と分かつたものだと感じする。「薪」といつても木ではなく蘇鉄や茅、アダンなどの葉である。燃やすとたちまち燃え尽きて、少年の人担ぎほどの量でやつと沸くぐらいであつた。五十年後、その少年は、ガス

のポタンを押し、そのまま忘れて鍋を焼け焦がしている。薪になるのが山と積まれて、放置されているのを見ると苦労した昔を思い出し、生活の様変わりがしみじみと思われる。

「与論島移住史」の本の中に、「与論島は、表現は悪いが、海というサクに囲まれた人間動物園ですよ。我々がエサを運ばなきゃ、みんな飢え死にしてしまう」という記述があった。腹は立つが、多分に言い得ている。牛は生産しているが、牛肉は島外から買っている。

「与論島は」といったのにカチンとくる。全国どこの離島どこも同じである。いや、日本国だってそうである。食糧の自給率は三十八割で先進諸国では最も低い。食料を売らないとなると飢え死にしかねない。太平洋戦争のきっかけの一つが、石油の封鎖だといわれるが、今や食料封鎖となったら、たちまち国の生死がかかることになる。

トウラの幼少期、五百^リほど離れたテイララキゴー（寺崎井戸）から水を汲み運んだ。桶やバケツを頭に載せたり、天秤で担いで運んだ。歩くと揺れて水が飛び出すから要領がある。蘇鉄の葉を浮かべて波立ちを和らげたりした。ある家で祝祭事があると、親戚が、薪及び潮水

や水を汲んで持ち寄るのは、物品の持参につぐ立派な協力だった。

与論島は山がなく、山の森がない。森に育まれた水がなく、流れる川がない。これはウマリ（生まれ・宿命）である。満州から引き揚げ田代に再度入植した与論開拓団が、薪と水が豊富なのが魅力だったと聞いた。むべなるかなである。ウマリを思う。

「薪は、前後ありといえども、前後際断せり」

薪にさきありのちあり。薪のさきは、青々と茂った木であった。のちは赤々と燃えた後の灰である。薪に流れる時間とウマリである。悠久の中の五十年、薪にうつろいとウマリを思う秋の夕暮れである。

平成十七年秋

位付け

長女が男の子を生み、夫と一緒に東京からつれて帰ってきた。初めて会う孫を迎えに、トウラは服装を正して空港に行った。目が見えていのかどうか定かでない生後三ヶ月のアービラグワー（赤子）に会うのに、トウラは胸にさざ波を覚えた。

迎えた夜、兄弟、従兄弟を案内して誕生祝賀会をした。

長女の母親（妻）は、長女が三歳の時に、劇症肝炎にかかり、十日ほど入院してばたばたと死んでいった。それだけにトウラは感慨無量なるものがあり、ことさらうれしかった。

トウラは昔ながらに「位付け」をしようと準備をした。

粟を入れるのは、同じ一升でも多い方がいいだろうと思い、ウクシ升を手作りした。ウクシ升は一升二合入る升である。その側面に氏名、生年月日、誕生記念と書いた。もう一方の側面には、「位付け枡、塩一升の位、粟一升の位、百二十歳の位」と書いた。

塩一升、粟一升、小石・サーラキ・鉛筆・ノートをそれぞれ高盆に

載せて神前に供えた。トウラは神前に額ずき次のように祈願奏上した。

「チットートウガナシ、ウヤヤーブジガナシ、特に美智子神様ガナシ、今回、雅子が男の子、陽人をさかえ、連れてきました。この子の健やかな成長を見守ってください。塩一升、粟一升、百二十歳の位あらしめてください。病気になつたり、事故にあつたりしないように、学問ができて、人にほめられるような人物になるように、見守ってください。今日は親戚一同寄り集まつてお祝いします。いつも今日のように祝い事ばかりで、弥栄えあらしめてご先祖様の御名上がりますように、チットートウガナシ、ウヤヤーブジガナシ」。

その後、イッチー（一対の神酒）を陽人の頭上で回す。塩升を頭上で回しながら「塩一升の位あらしめて賜れ」と唱える。粟升、小石、サーラキ、鉛筆・ノートを同じようにする。

雅子の夫は東京の人である。私の子どもや甥や姪もこの位付けの意味を知らないだろうということとで説明を加えた。

何故位付けなのか。古来、日本の国、大和の国は「言霊のさきおう国」といわれている。これは言葉の靈妙な働きによつて幸福がもたら

される国、ということである。言葉に宿っている不思議な靈威、靈力が働いてその言葉通りの事象がもたらされるという「言靈信仰」である。位付けすれば百齋その通りになると信じる人はいないだろう。生まれてきた子どもへの祈りであり、願望、期待である。男は心を込めてしめやかに執り行つた。念ずれば花ひらく。

塩一升の位↓塩は悪靈を払う力がある。払い清めて塩の真白。

新生児は弱く、悪靈に魂を取られやすい。そのため着物にマブリ（守り）を縫い込んだりする。

粟一升の位↓五穀（米、麦、粟、豆、黍）を代表させて豊かさの祈念。

何故粟なのかは、五穀のうち粒が最も小さく、数が多く、一升升の中に入っている粟粒の数だけ（無限大）豊かになる位付け。ドウダンミン男は、一回り大きなウクシ升にした。それだけの思い入れを升に込めた。終了後は、喜びを分かち合うために分配した。

百二十歳の位↓曾祖父九十二歳、曾祖母九十七歳も当日その祝宴にいた。長寿のDNAを受け継いだ。

小石↓石につまらずいて転ばないように。事件事故に遭わないように。

ひいては、人生転ばないように。

サーラキ↓棘のある植物でその棘でけが等をして病気になるように。つまり無病息災の祈願。

鉛筆とノート↓東京で身を立てるのだから、基礎となる学問を身につけるように。大工にしたいときは大工道具を供える。女の子の場合には、裁縫道具を供えたりする。

孫は目の中に入れても痛くない。孫のためには泥棒までする、位付けなんて古くさい奴だと思いでしようが、トウラはそのようにして育てられてきた。子どもは育てたように育つ。先祖の神様に謙虚に祈る。それを出発点に孫の健やかな成長を見守りたい。

平成十七年十月吉日。

イヤープジ

与論ではお盆のことをイヤープジという。旧暦の七月十三・十四・十五日である。旧暦にする理由の一つは、海の潮時に合わせたものである。三月三日のハマウリ（浜下り）が旧暦であるのも同じく潮時に合わせている。

イヤープジの前日は、お墓に行つて掃除をして「明日から、イヤプジパジミ、ウン、パルヌチクイムジクイ、シャーチヤミテイ、イエーシャービュークトウ、ソイクーラチ、ウワーチタバーリ（明日からイヤープジだから、海のもの山のもの作物の数々取り揃えてお供えしますので、連れだつておいでください）」と奏上する。

お盆のことをなぜ「イヤープジ」というのか？先祖のことを「ウヤイヤープジ」と言う。上の「ウヤ（親）」を省いてイヤープジと言うようになったのだろうとドウダンミンした。

この三日間は、ご馳走をつくつて供える。子ども頃は、お下がりの白いご飯が食べられるので非常に楽しみだった。親元にはお米と酒

を供えに行く。男が参拝しているところは、妻・母・祖母の実家、祖父の親元、曾祖母の親元の五カ所である。

イヤプジにアダンの実を供える。これはその昔食用にしていたことの証拠だろう。男は、子どもの頃食べた。味も覚えていた。

アダンの実を供えることについて、ある識者が、「ウヤイヤープジが、供えてあるご馳走をあの子に持ち帰る途中で、魔物が横取りしようとする。そのとき、アダンの実をちぎって投げつけて撃退するためのものである」と話した。なるへそ、なるふぎ。「古事記」の中にある、桃の実を投げつけて鬼退治をした話にちなんでいる。文字、印刷が普及していなかった古い時代に、民話、伝説、神話など広域的、歴史的に共通性があるのは興味深い。

「イヤープジの中日に死ぬものはすり鉢を頭に乗せて葬る。祖霊の留守にあの世に行くことは泥棒に來たとされ、墓の留守番係が頭に石を投げつけるから」と菊千代著「与論方言辞典」にあった。

祖母は、夜ご馳走を運ぶとき、ススキの葉や藁で輪を作り、息を吹きかけてご馳走の上に載せて運んでいた。途中で邪鬼に横取りされな

いためのまじないである。

イヤープジのご馳走は、死者を送り出した正面に（死者は玄闕からは送り出さない）向けて供える。入って来られるように正面の戸は開けておく。一定時間線香をともしるとともに過ごす。最終日は早めにお供えして送り出す。

イヤープジの三日間は、この世の家族があゝの世の家族をもてなし、共に過ごす行事である。



平成十八年二月記

トウンガ

旧歴の八月十五日。中秋の名月。

琴平神社の境内では与論十五夜踊りが舞われ奉納される。終盤、東の空に中秋の名月が輝きわたる頃には、参加者全員で綱引きが行われる。綱が引きちぎられる。ちぎれた切れ端のわらで人をたたいて回る。これは厄払いをして無病息災を願う意味があり、わらは持ち帰る人さえいる。この綱引きは来年の吉凶を占うもので切れてもらわなければならぬ。毎年城の老人クラブが作っているが、真ん中の強さの加減が難しいそうである。綱引きに続いてカチャーシー（老若男女かき混ぜた全員踊り）がある。男たちはほろ酔い気分も加わり盛り上がる。この日与論ではもう一つ祭事がある。五穀豊穡を神様に感謝するためにその年にとれた五穀でトウンガ（餅・菓子）を作りお供えし、来年の豊作を祈願するのである。

神様すなわちお月様からみえる庭に台を置き、その上にパラカソイ（竹で作ったざる）にトウンガを入れて供える。それをよその子ども

たちがこそつと取っていく。取られた家では「神様が召し上がったあ
る」と言つて台を直した。ドウダンミン男が小さい頃は物陰に隠れて、
家主のすきを見て取った。トウングは竹の棒につき刺して持ち歩き、
友達同士で数を自慢しあい、少ない者には分け与えたりした。

「とつた」と言うより「盗んだ」。この日は特別にこれが許された。
許される背景に、童は純真無垢で神であるという考え方があつた。すな
わち、神様にお供えしたのだから、童神ならとがめられないというわ
けである。

那間地域では「トウング ヌスドウ（トウング盗み）」と言つてい
た。茶花では「トウング モーキヤ（トウングもうけ）」と言つた。
「盗人」とはいかにもきたない表現だからだということだつた。今で
は「トウング、トウング」と言っているようである。

現在のトウングの風景は、ドウダンミン男の子どもの頃とは様変わ
りした。こつそりといただくのではなく、堂々と顔を見せて請求する。
しかもトウングではなく、お菓子をくれという。お月様にお供えしな
い前から回る。聞くところによるとタビンチュのお母さんは子どもに

ついで袋を下げて回っているという。開いた口がふさがらない。それは乞食である。子どもももらうのは権利ぐらいに思っていて、氣に入らないお菓子のはきは、いらないう言う子どもさえいるという。あきれてものが言えなくなる。こうなってしまうともう神様ではなく、文字通りの餓鬼である。腹が減っているのではない。物欲の心の飢えである。

これはどう立て直していけばいいものだろうか。

煌々とさえ渡る中秋の名月とは裏腹に、ドウダンミン男の心はどんよりと曇り、鉛を詰め込まれた思いになる。

平成十六年中秋

正月豚

中学生の頃、鶏をつぶし解体するのは私の役目だった。雌鳥のはらわたを割くと、卵の黄身が大きいものから小さいものへと生まれる順番にきれいに並んでいる。つぶすときは、首をひねり棒切れで首を押さえつけて殺す。死ぬまで鶏は必死に動かし時間もかかり、大変である。それで名案だと思つて、鶏の両足を紐で縛り付け、足を左手に持ち、頭を下にして立ち木に押さえつけ、斧で首を断ち切つた。それで即死だと思つていた。あにはからんや、一撃したとたん、バタンとすごい力ではねて落ちたと思つたら、はねてはねて飛んだ。首は皮一枚で垂れ下がり、はねるはねる飛び跳ねる、あたりかまわず跳ね回つた。追っかけて押さえつけようとしたが、とてもじやなかつた。両方縛られている足で五尺ほど跳ねる。手がつけられずびっくりして見ていた。鶏一羽失つたかと思つた。まもなく倒れた。その映像は五十年たつても色あせることなく、脳裏にカラーで焼き付いている。

中学三年の暮れの正月、私の家で飼つていた正月豚（二百斤はあつ

た)を、ハニ兄が来てつぶした。私はその手伝いをした。

ハニ兄は繩をもち、豚小屋に入り、豚の右前足のくるぶしをしぼり、引き倒すと同時に左足で豚の頭を踏んづけ動かないようにした。那間部落中に聞こえるような叫び声を発した。私に後ろ足を縛るようにハニ兄の命令が飛んできた。こわごわしながらも、クイグシ結びで片足を縛り、もう一方を一緒に縛った。ハニ兄が今度は前足と後ろ足を引き寄せて縛り上げた。豚は丸くなった。

丸太ん棒を通して、ハニ兄は後ろを担ぎ両手で豚の足を捕まえ、私には棒のずつと先を担げと命じた。前の田んぼの畦まで担いでいって今度は丈夫なハシゴの上に身動きできないように縛り付けた。その間、耳がつんざかれんばかりの叫喚の連続である。田んぼの水をバケツで豚の首に掛け、藁を束ねてごしごし洗った。血を受けるためにビンダレー(アルマイト製洗面器)を豚の首の下にすえた。ハニ兄が、刃渡り一尺はある包丁を右手に持った。

いよいよその時である。

左手は首を押さえ、腹に向けて包丁を刺し込んだ。血がほとばしり

出た。水道の栓が抜けたような勢いで、瞬く間に洗面器いっぱいになった。豚の叫びたるや阿鼻叫喚地獄もかくやと思われる大音響だった。洗面器を換えてから、ハニ兄が「代われ」と言った。私に体験させるためである。命じられるままに代わった。叫び声も血の勢いも衰えた。豚全身の慟哭、心臓の鼓動がもろに手に伝わってきた。血を全部出すために包丁を右に左に動かすように言われた。その度に、血がどくどくと流れ出た。二百斤の豚の強烈な肉感、燃えあがく命がもろに右手から伝わってくる。それは今も右手にある。記憶は、脳味噌だけではなく手や足にも刻まれるものである。舌にはお袋の味が記憶されている。聞いたことは忘れ、見たことは憶え、体験したことは一生忘れない。五十何年も前の情景が、一枚の写真のように止まったままでいる。その日は、よそからも同じ鳴き声が聞こえてきた。二く四軒ごとにある正月の恒例行事である。

今では体験できない化石体験である

平成十七年正月記

又サリ

「又サリヤホウラジ（運命、宿命、運は買えない）」

又サリナテイドウ、シニユル（運命だったから死ぬ）。あきらめなさ
いという、慰めの言葉である。アリガ又サリ、ナグリヤー（あれの宿
命、可哀想）。与論島が始まって以来の、命に関する、あつてはならな
いことが、二件も起こった。ある先輩が、「アツシユル又サリムツチュ
ルムナー、ナグリヤー」と言った。自分の又サリに自分で手を突っ込
んで起こしたことだっただけに、ドウダンミン男は、「あんなのは又サ
リとは言わない」と反論した。しかし、自分ですることも含めて、そ
うする又サリだったとも言えるので、自分の浅はかさを反省した。

「ウマリヤー、ナーラウブン（生まれは、半分の幸運）」与論の先人の
名言である。あと半分は自分の努力で達成しなさい、と。

小野小町、楊貴妃、クレオパトラ、マリリンモンロー、イギリスの
ダイアナ妃等は世界に名だたる美女である。生まれついた美姿の上に

磨きをかけたことは言うに及ばないことである。

「傾城の美女」とは、城を傾ける程の魅力を持った美女を言うそうである。中国の西施や楊貴妃が名高い。クレオパトラの鼻が後一寸高かったら世界の歴史は変わっていただろうと言われる。しかし、この歴史上名だたる美女西施、楊貴妃、クレオパトラ、マリリンモンロー、ダイアナ妃いずれもい期最期は迎えていない。あまりの美しさ故だっただろうか。又サリだろうか。

ちなみに、絶世の美人を与論では「幽霊美人」と言うそうである。えっ！とびつくりした。訳をきくと「この世のものとは思えないから」だそうである。それにしても幽霊とは？言われた本人はどう思うだろう？

「美しい」ことを与論語で「タガロウシヨウ」という。これは姿形全体が整って美しいという意味である。嫁いでいく娘に、母親が、「夫に決して寝起き姿を見せるなよ」と諭した。いくら生まれウブンがあつても、髪乱れたままでは飽きられてしまう。早く起きて鏡の前で身だしなみを整えてスタートする嫁の心得をいったものである。

ある技芸の達人が「天才だ」と褒められるのを不満がっていた。それは、努力を認めないで「天才」の一言で片づけられてしまうからということだった。

事故に遭う・起こす又サリだった、美しいウマリだと運命的なものに逃げ込んだり、片づけるのはたやすく、心安らぐ。がしかし、怠慢ゆえの部分もあるように思える。



平成十七年十二月記

三十三年忌

与論の年忌祭は、一年、三年、七年、十三年、十七年、二十五年、三十三年忌が行われる。「三年、七年」の繰り返しになっている。佛教では死後の祭りを七日目ごとに七回行われ、七回目が四十九日となる。「四十九日はインド佛教から伝わったものである。その後中国で儒教の影響を受けて百か日、一周忌、三回忌が加わった。日本に伝わってさらに七回忌、十三回忌、三十三年忌が生まれた。七が出てくるから十七回忌、さらには五十回忌が出てきて、その半分の二十五回忌が加わった」と、ものの本に書いてあった。

三十三年忌は最終回である。これがすむと御霊は昇天するといわれ、着けて飛ぶためのトウビギヌ（飛び衣・羽衣）を供える。その後の命日には「水の初」と「洗米」を供え、煮物は供えない。

この年忌祭は、旅から兄弟、子や孫を呼び、親戚を招いて盛大にするとある。古式豊かに歌三味線太鼓を入れ、当主から順に出席者が踊る。三十三年忌は「お祝いだ」といわれたりする。昔は歌三味

線、太鼓をたたき墓まで行列をつくってお送りして行ったという。神官を呼んで格式にのつとつて行うところもある。

私の父は、祖父母のそれは、親戚に難儀をかけたら申し訳ないということで家族だけでした。それでも孝は通ると。しかしトウラは、親族に面倒をかけてもやりたいと思っっている。遺していきたい風習で、立派な無形文化財だから。

以前、死後四十九日目のシーニチ（祭り終わり）にはヤブ（占い人）を呼んでムイジュトウ（死者のこの世の近親者へ思い残したこと）を言わせた。

今時の死後祭りは、十日、二十日、三十日、五十日、百日祭である。一般的に三十日にシーニチをして、神官に「床上げ」をしてもらっている。「床上げ」とは、白木の位牌を焼き上げて、祖霊の位牌に移す儀式である。幽明界をさまよっていた霊は、このとき初めて昇天して神様になるそうである。

与論のお通夜と十日祭りは参列者が以前より格段と多くなり、何百人の所がある。お通夜は、近親者が集まり遅くまで霊を慰め、生前を

偲んでいた。十日祭りに参加するものほとんどが親戚のかたがただだった。喪家では十日祭りのお返しを準備して持ち帰らせている。品揃え、人数予測など思案、苦勞の多いことである。今時、出棺前に参列者に対し、十日祭りに出席を乞うようなことを言う所があるが、そぐわないようにドウダンミン男には思われる。ドウダンミン男が、父の葬儀のとき「十日祭りはしない、父の遺言でもある」と言ったら、「自分勝手なことをして」という非難と「偉い人（当時教育長）から改革しなければいけない」との賛意と二通りあった。

「飲み食いには他人が集まり、悔やみには身内が集まる」と言われる。葬祭は、故人を偲び、心込めて供養専一でありたい。南無阿弥陀仏

平成十七年二月記

ホーハイ

火玉のことを与論語でピダマという。ピダマは火事を起こす。

昔、煮炊きをするところはウスムトウと言って土間だった。土間の上に石を三個置きその上に鍋をのせて煮炊きをした。石はピヤンジャナシと言って特別扱いで、その昔火之神祭りの対象であつた。煮炊きをするとき火にくべるのはパーダムヌ（蘇鉄やアダンの葉が枯れたもの）だった。ぱつと燃え上がり、すぐに燃え尽きてしまうので連続してくべなければならず、山と積まれたパーダムヌに火が燃え移る恐れもあり、火のそばから離れることはできなかつた。昔は主食が芋だったから、煮るのに時間がかかり大変だった。もう煮えたかと箸をつつこんでみては、まだか、まだか何回も試した苦い思い出がある。

トーグラ（母屋に並んだ台所の家）は茅葺きで、天井はなかつた。火が屋根に燃え移るのを防ぐために、かまどの上には火返し用のハマダラ（釜棚）をつり下げていた。

ピダマは、ハマダラの上あたりの物陰に赤い着物を着て、赤いウチ

クイ（タオル様の布を頭にかぶる）をして潜んでいるという。そして隙があつたら火事を起こして飛び去り、次の家に潜むと言われる。実際ピダマを見たという人もいる。

火事が起こると、その隣近所の人は、大声で「ホーハイ、ホーハイ」とおらぶ（叫ぶ）ものだという。「ホー」は与論語の「ポー」（女性の陰部）が転化したもので、「ホーハイ」はそれをさらけ出している意味である。なぜかピダマは、それをことのほか嫌うため、ピダマが自分の家に飛び移ってこないように「ホーハイ、ホーハイ」と魔除け呪文を叫ぶものだという。三回火事を起こした女が死ぬとピダマになるという。

父竹下茂徳は、教員時代に凶工を担当していた。昭和初・中期にかけての社会教育は、学校の教員が行っていた。当時の家庭の環境整備項目を与論町誌から転記すると、
○清潔整とん
○改良かまど
○改良便所
○改良畜舎と堆肥
○農道の普及発達について
○耕作地の効率的活用について
とある。項目を見ただけでも現在と

は隔世の感がある。

茂徳は、改良かまどの普及に努めた。(こんなことを書くとき親の自慢をする馬鹿息子よ、と笑われるが、笑われるのもまた一興。) 当時は勤務時間の観念などなく、家庭を回り奉仕作業をした。改良かまどは、煉瓦とセメントで作られ、煙突もある熱効率の高いもので評判がよかった。それまでのピヤンジャンシのかまどとは比べものにならないものだった。私の家は、大きなニンメーイリ鍋用の釜、普通の釜、小さな釜を三つ並べてあった。ドストルがついて灰は下に落ちてたまり、煙突が煙を吸い上げるために火が勢いよく燃え、部屋に煙も充満しなくなつた。火の始末も行き届き、ピダマの出る幕が少なくなつた。天の悪神から、ピダマは働きがたりないと怒られ泣くようになった。「ホーハイ」も死語になつていく。

平成十七年十一月記

ムヌ（幽霊）

子どももの頃、幽霊話をよく聞かされた。ムヌ（幽霊）には、ウワームヌ（豚）、ヤータチムヌ、クビキラ馬、クビキラモーミヤ（首の切れた子牛）等がいた。私の家で祭りがあつた晩、父と親しかつた里川ウブ（翁）が、ヤータチムヌに襲われた話をした。その昔老婆が横穴を掘っていて生き埋めになつたと言われていた森があつた。夜遅くそこにさしかかつたとき、突然真つ黒な幕に包まれた。一寸先も見えず動けない。ああこれはヤータチムヌに襲われたと思つて、ありつたけの大声で叫んだ。すると黒幕が上がると同時にガツパラグピナー（大きな子牛）が土を蹴上げて逃げていった。ウブは、翌朝昨晩の所に確かめに行つた。そこはカボチャ畑だつたが足跡もあらされた跡もなかつた。後年、トウラ（私の幼名）は夜そこを通る度にウブの話の思い出し、背筋に寒さを感じながら通つた。そのシブラは今はない。

立長のウワーナンディ石の付近は、ウワームヌが出ることで有名であつた。そのウワームヌに股をくぐられると死ぬと恐れられていた。このウワーナンディ石は、道路拡張のために割られて小さくなつてゐるが、元は子ども五六名が乗つて遊んでいた大きな石だつた。

母は、茶花小学校に勤めていた。ある日研修会を終えて夜遅く帰つた。ウワー

デイラあたりに来たとき、クビキラ馬が立っていた。そんなときは「天皇陛下の使いで歩いてゐる」と言えば通してくれるときいていたので、その通り言ったら藪の中に引つ込み通してくれた、とよく話していた。

従兄弟の正人兄とイーガギヌに草刈りに行った。月が照っていて明るく、仕事が遅くまでできた。草が詰まったウンポードを担いで家路についた。トウラが前だった。夜道を歩くときは弱いものが前になるものだった。魔物に襲われたとき、前だと気付いて助けられるし、後ろはなんとなく怖いものだった。

前方の林の上を見上げたら、白いものが木の上でゆらゆら揺れていた。トウラ（私の幼名）は背中が凍るのを覚えた。思わずあぜ道を踏み外しそうだった。風はなかった。後ろの正人兄に合図しようと思ったが、もう、体はがちがちになり、振り向く勇気がなかった。

家に帰り、ふるえが止まってから、見たのを話したら、「ウン、見た」と兄は一言言った。それ以上話すな、といわんばかりに押し黙った。やっぱりあれはム又（幽霊）だったんだな」とトウラは思った。後日正人兄に、「あの時怖くなかったか」と訊いたら、「怖かったサー」と言った。トウラは強い兄でも怖かったのかと自分の臆病が癒されたようで、ちよつぱり安心した。

電気がなかった当時の与論島の夜は、漆黒のやみで、幽霊が出歩くのに都合が

よかつた。それに藪が深く、すみかも多かつた。

トウラが大学のときに、弟や妹と鹿児島市郡元の山裾で自炊をしていた。ある夜、家の近くで若い女の鉄道自殺があつたというニュースが入つた。トウラは怖いもの見たさに現場へ行つた。寒い冬の夜だつた。人だかりがあるだろうと思つたが、二・三人が立っているだけだつた。そこは日本たばこ産業の倉庫が立ち並ぶ裏手だつた。死臭でやってきたのか、猫が二匹、目を光らせて様子をうかがつていた。そのうち、担架を持って人がきた。私に乗せる手伝いをしてくれ。足を持てと言つた。馬鹿なトウラは言われるままに、女の白い足をもつて乗せた。

その足の冷たかつたこと。今もその冷たさは手に残っている。夜中起きて便所に行つた。戸を開けたらそこに・・・あの女がいるように思えて、怖かつた。二・三日それが続いた。トウラは、臆病者のくせに猟奇心で片意地張つた自分がいやになつた。

昔与論の海に入水自殺した女がいた。その搜索に青年たちがかり出された。その一人が、「チットトウ、ワヌンヤミーチキラリテイタバンナ（自分には見つかつてくださるな）」と心の中で唱えて海に飛び込んだ、と話していた。トウラは同感だつた。それを笑う勇氣のある人は、非常に尊敬する。

平成十七年十二月記

ウグミ

幼少の頃、大人たちが祝祭事の夜（当時はいつとも夜だったような気がする）の集まりで、ムヌ（幽霊）の話をよくしていた。それを端で聞いていて怖い思いをした。その話を思い出しては、小便に行くにも怖い思いをした。当時電灯はなく、夜は真つ暗だった。

ムヌの種類は、ヤータチムヌ、ウグミ、ウワームヌ、イシュシャ、クビキラモーミヤーなどで、それぞれ出る場所があつて、そこはムヌヌヤーと呼ばれていた。当時名高かつたヒブラ（森）は開墾されて今はない。

ウグミは、産女（うぶめ）の話として奄美大島、沖縄、東南アジア各地にある。川村俊英氏の説によると、ウグミは漢字を当てると「産込み」（ウゴミ）で、転化してウグミになつただろうとしている。ウグミは妊婦が死亡し、幽霊になつたもので、あらずじは次の通りである。

ウグミは、赤子を「うわあ、うわあ」と泣かしながら抱いて歩く

そうである。人に出合ふと、しばらく抱いていてくれと頼むそうである。そして草履を貸してくれと頼む。その時は草履の鼻緒を切つてから渡すものだそうである。そうしないと鼻緒が切れるまでウグミは返つてこないそうである。なかなか返つてこないときは、赤子をつねつて泣かすと、ウグミは返つてくるそうである。妊婦をいじめ、万一死んだらウグミになったり、死霊（シンロウ）になつて崇るといふ。そのため、妊婦をいじめてはならないといわれている。

「産科医がいなく 県境の島で」という表題で、平成十六年二月十日から十九日まで、南日本新聞社が特集していた。その項目だけ列挙する。

- ① 与論の現実 五十二人中五十一人島外で誕生
- ② 台風接近 破水始まりへりを要請
- ③ 転勤族 子ども欲しいけど・・・
- ④ 月二回 東京の医師ら妊婦検診

- ⑤ 赤字の診療所 医師確保できず休診に
- ⑥ 長崎県の離島政策 三十四年前から医師”育成”
- ⑦ 署名活動 「将来」危ぐし補助訴え
- ⑧ 助産院開設 「家族と」願い受け止め
- ⑨ 医療進歩の陰で 不安の解消いつの日に

私の娘は、三名の子どもを産んだ。三名とも沖繩の「かみやクリニック」で出産した。妊産婦検診、出産、乳幼児検診と正常であっても何回となく通う。出産が近づくと早めに行つた方がいいと、数日・数週間前に行きホテルで待機する。いざ出産となつたときや出迎えに家族が行く。経済的な負担だけにはとどまらない。離ればなれになる不安もある。家の中で一番弱い立場にあるのは嫁である。何週間も家をあける気がね、子どもや家族を残してきた不安もある。妊婦が子どもを産むのは、命をかけた一大事業・難事業である。帝王切開がなかつた一昔前は、特にそうだった。無事出産したらイケーヨイ（生き返り祝い）とさえ言った。

日本全国、少子化傾向にある。平成十六年現在、東京都は一組の夫婦の子どもが一名を切つたと報じられた。将来の国民年金や国民保険に関係してくると、国も危機感を抱き、対策に乗り出そうとしている。戦前戦中「産めよ、増やせよ」の国策で、子だくさんだった。私の兄弟は、今生きているので八名いる。政策がとられれば増える。

すでに他県の町村では補助金を出すなどの施策を行っているところがある。与論島は外海離島。一島一町。船長一人。一つの舟に乗り合わせたも同然である。子どもの数が減つたと嘆く人は多い。嘆くだけでなくでは解決しない。具体的に五十万円、できれば百万円、渡しつきりで援助してあげたらどうだろうか。財政難は分かるが何より優先すればできる。声高に訴えるところにはばかり目を向けるのではなく、不安をいっぱい抱え、訴えもしない弱い嫁のことをおもえば、こちらからやってあげるべきだとドウダンミンする。かてて加えて、子どもは島の宝、その子への未来投資と考えればや

すい、安い。

ある識者が言った。「パナ アガトウル ヲウギ カテイヤ コ
イヤ イリランバン ナユン（花が咲いているサトウキビには、肥
料を入れる必要はない）」。言わんとするところは、苗や若木に入
れよ、ということ。

玉も黄金も何せむに 勝れる宝子にしかめやも

平成十六年三月記



生

“生” 生まれると生きるは、ともに「生」の字でイコールである。生まれたら死ぬまで生きる。生まれたら最後、死を背負い、死へ向かって歩き続ける。人生は、生から死への途中に老、病のある旅路である。お釈迦様はこの生、老、病、死の四つを四苦といつた。苦でも楽でも何でもない当たり前のことなのに。

生の字は次のようにいろいろに読ませている。

生憎（あい）、生きる、生理め（いき）、生田（いく）、生垣（いけ）、生まれる、生れ年、昭和生（うまれ）、生出す（うみ）、生い立ち、相生（おい）、生そば（き）、生粋（きつ）、福生市（さ）、生涯、誕生、生活、平生（ぜい）、鈴生り、生ビール、生業（なり）、殖生（にゆう）、生え抜き、生際（はえ）、芝生、壬生（ぶ）、生呑み（まる）、草生す（む）等百五十もの読みがあるという。一つの漢字でこれだけの読み方があるのはめずらしい。「生」が重宝だからだろう。

この世の中で何が一番めでたいことかといえ、赤ちゃんが生まれることである。

赤ちゃんには父と母がある。その父と母にさらに父と母がある。一人の赤ちゃんにつながる幾百万の父と母がある。その幾百万の命・恩恵を受け継いで生まれてくる。そしてその子はやがて幾百万の祖となる。

ちまたで「子どもをつくる」とか「子づくり」という言葉を聞く。子どもをつくることのできるのは神様であつて、人間ではない。「授かる」と「つくる」には、子どもに対する考え方に天と地の差がある。生まれた赤ちゃんに対する接し方に天と地の差がある。天恵による「さずかり」、後世への大切な「あずかり」である思いを深くし、軽々に思ひ上がった「つくる」という罰当たりなことを口にしないようにしたいものである。テレビで報じられる幼児虐待は、子どもを「自分がつくった」という高慢の上ない悪魔の思想から出ていると思えて仕方がない。いたいけな我が子を虐待するものには即座に神罰を下してもらいたい。しかし、神様は、人間がそこまで悪くなるとは予想してい

なかつたようで残念である。

祝舞の小道具として使われる扇は、縁起のよい末広りの形をしている。扇の要の部分は、幾百万の祖先の遺伝子が注ぎ込まれる一人の子どもに象徴できる。それがまた幾百万の子孫へと伝わり、広がりゆく要となる。

生の字は象形文字。「 」。草木の芽がはえ出た形にかたどっている。「生」は、動物、植物を問わず、生きとし生けるもの共通の仕組みである。人は思い上がり、「生」の真意をかみしめたいものである。

生まれる \parallel 生きる \parallel 子孫に伝えて生きる
めでたい、芽出たい、目出たい。

平成十七年五月記

心臓時計

一生の時間は、心臓時計約十五億拍分だそうである。心臓が十五億回打つと死ぬ。一生に打つ回数、象もネズミも人間もほぼ同じだそうである。ハツカネズミはその名の通り二十日間で死ぬが、やはり十五億回打つ。そうなると人間の時間、象の時間、ネズミの時間、みんな違うことになる。

十五億回打つ間が寿命である。早鐘のように心臓を打たせ続けた人はそれだけ早く死ぬし、ゆったりゆっくり打たせた人は、長寿だということである。

ある長寿者が、「長生きの秘訣は何ですか」ときかれて「せかせかしないこと」と答えていた。納得である。

共に百歳を超えた双子の姉妹、金さん銀さんは、テレビのアナウンサーに「このお金何に使いますか」ときかれて「老後のために貯金します」と愛嬌たっぷり答えていた。あっぱれ！この発想こそ長寿の源泉だと思った。

年を取った証拠の一つが、怒りっぽくなることだそうである。男は生まれつき短気な上に、近年とみに怒りっぽくなってきたことを感じ、これは「いかん」と反省する。好々爺になろう。明日は好々爺になろう。「なるう、なるう、明日は檜になろう」ということで「あすなる」という木がある。木でさえ「明日なろう」と努力するのだから、老いても「明日はなるう」と念ずるだけでもいいではないか。

七十路に入った男は、物忘れがひどくてあきれ果てている。今し方がどうしても思い出せない。財布がない。めがねがない。家族も巻き込んだ騒動である。

ある家庭の七十過ぎの姑が、財布がみつからないという。家族みんなで家中探したが見つからない。姑は、嫁を疑い「あんたが取ったんだろう」と言った。嫁は「絶対に取っていない」と否定した。姑は「あなたのほかに取る人はいない」と言い張り、ついに嫁を追い出してしまった。後日、その財布は、押入の布団の間から出てきた。結局、姑が大事に布団の間にしまい込んだのを忘れた結果の出来事である。笑うに笑えないほんとはあった話である。ドウダンミン男はこれを自戒

話として忘れてはなるまいと思う今日この頃である。

物忘れは、脳味噌の劣化である。脳味噌の最盛期は二十代で、それ以後は、細胞が死滅したり断線したり、劣化は免れない。劣化は脳細胞だけではない。体全体で起こり、死んでいく。生者必滅の理（ことわり）である。

コンクリートの建物も劣化する。鉄橋も金属疲労を起こす。石も風化して土になる。劣化しないものなどない。太陽の命も四十億年とか。宇宙も生々流転する。変わらないものなどない。変わることをだけが変わらない。

解剖学者の養老孟司は、「脳を鍛えるためには自分を変えることである」と言っている。自分が変われば、今までとは感じることも、することも違ってくる。それが刺激になって脳が鍛えられる。もう一つ、「笑いは百薬の長」。女性の平均寿命が男性より長いのは、よく笑うからだそうである。結局、薬局、よく笑う自分に変わることに。それが老いの坂を緩やかにする。さようでつか、はっはっはあー。

平成十七年十二月記

又子（命）

アメーバは死なない。アメーバは一つの細胞でできていて、二つに分裂して、二つのアメーバになる。また次二つに分裂する。それを何億年前から繰り返して元のアメーバである。

人間の目の角膜や腎臓、肝臓の臓器移植ができるようになった。借金を取り立て屋が、「腎臓を売って払え」と怒鳴るのがいるそうである。空恐ろしい世の中である。移植された人が、次の人にその臓器を譲ったら、生き続けていくだろうか。そうなるとその臓器は死なないことになる。そうなったらSFの世界である。

少子化が、国を挙げた問題になっている。

この世の中のもの生命で分けると、生物と無生物になる。更にその二つの違いは？となると、生物は「子孫を残す」という特徴がある。裏を返すと子孫を残して生物の資格と言える。雌と雄による有性生殖と分裂などによる無性生殖はあるものの、子孫を残すことが使命であ

る。「使命」とはそのために「命」を「使う」ことである。生物を作つた神様によつて決定づけられたことである。

生まれて成長し、親がしてくれたように子を産んで育てて、死んでいく。それを連綿と続けていく。生物とは、そのために「生」まれてきた「物」で、そのために「生」きる「物」として「生物」と命名した。(拍手)

鮭(さけ)は、生まれた川に必死でさかのぼり、卵を産んだ後は力尽きて死んでいく。

ライオンの雄は、今までのボスと戦い、勝つたら前のボスの子はかみ殺し、自分の子だけを遺すという非情をする。

生物は、全知全能をしぼり、全力を尽くして子孫を残している。

角が自分の頭に食い込む方向に曲がる動物がいた。その動物は、自分の角の進化によつて子孫が途絶え絶滅した。

人間は、知能が発達し、文明を発達させてきた。発達した知能故に、自己本位に走り、子孫を残そうとしなくなつたものが出てきた。諸条件もあり、一概に言えないかもしれないが、少なくとも「使命意識」

の意識が薄れてきているのではないかとドウダンミンされるこのごろである。

人類が発達させ続けている文明も、前出の角のように人類自身に向いているのではないかと思えてならないきのう今日である。

「ヌチドウ宝」。命が宝であるためには、命が命を生み、子孫を残すことである。アメーバは分裂によって生き続ける。人は子孫を残すことよつて、遺伝子を通じて生き続けるのである。遺伝子は死なない。

「命」とは、天の定め。「天命 \parallel 子孫を残す」。この紋所が目に入らぬか。頭が高い。控え居ろう。ハア、ハア。

平成十七年十一月記

尊厳死

アメリカで十五年間植物状態だった女性の尊厳死をめぐり、全米で論議が巻き起こった。賛成に回った大統領の支持率が落ちるほどの騒ぎとなった。女性の夫の尊厳死の求めに応じ、栄養補給装置がはずされ十四日目に死亡した。女性の両親は、反対だった。さて、あなたはどちらでしょうか。

私の母は九十七才。朝起きると神棚に祈るのが一日の始まりである。九十五・六才までは「今日も元気で起きられた、ありがとうございませう」と言っていたのが、近頃では「早く連れて行ってください」を発するようになった。

母は、医者をしている息子に「私が意識不明になったら、延命など考えずに、さっさと注射で楽にさせてくれ、今のうちに厳命しておく」と言っていた。トウラも同感である。

私が尊敬する先輩が、ガンにかかった。子ども達が手術をすすめたが「もう、いい」と言って与論に帰り、数ヶ月したら亡くなった。死の

直前までしつかりしていた。まだ七十歳前だったので、治療を受ければよかつたのにと思う反面「あつぱれ」と思つたりした。トウラだつたらどうするだろう、胸の振り子は揺れに揺れることだろう。

トウラの前妻は、劇症肝炎にかかり、十日入院をしてばたばたと死んでいった。入院後四日目からは人事不省に陥り、酸素吸入器などの医療機器に支えられて生きていた。意識不明の状態でいいから生きながらえて欲しい。奇跡が起こつてくれ。治療革命があり、救えるかもしれない、必死に祈り続けた。二十七歳の若死にただだけに植物状態でもいつまでも生きてもらいたいという思いだつた。

昔、嫁にやつた娘が嫁ぎ先で、病気で死んだ。その実母が通夜の席で「ワークワーヌイヌチ、ワキチャメーリ（我が子を生き返らせなさい）」と声を荒げてそこの主人に詰め寄つたという。空恐ろしい。

トウラは、妻の遺骨を抱いて与論に帰つた。待つていた妻の祖母に身も心も小さくして、申し上げる言葉もなくただ頭を下げた。祖母は、「美しい花は神様も欲しかつたんだね」と一言言つた。その一言で重罪犯は無罪放免になつた。

「ぼっくり寺」に参拝する人が大勢いることをテレビが放映していた。元気でいて死ぬときは周りに迷惑にならずに、ぼっくり逝かせてもらいたいという祈願である。誰しもが願うところである。

安楽死、尊厳死はケースバイケースで一概に言えない。遺族に子どもが二人以上いるとそれぞれ考えが違わないとも限らない。死に方もきちんと遺言しておくのが置き土産と思えるこの頃である。

平成十七年七月記



人はだんだん生まれだんだん死んでゆく

人は、母の体内で一個の受精卵として生まれ、細胞分裂を繰り返して、十月十日、子宮内で過ごして生まれ出てくる。「子宮」とは子ども「宮」。よくもいい名前を付けたものである。人間一生のうちで最も快適な所である。安全安心、暑さ寒さ知らず、何不自由なく、湯船につかって暮らす。まさに極楽である。たった一個の細胞から急激な成長を遂げ、人間の全機能を備えて生まれてくる。

それから成長を続け成人する。

月が満ちたら、後はだんだんかけていくように、ピークを過ぎたらだんだん死んでいく。

臓器移植問題が出た頃、「脳死は人の死か」、どうか論議された。冷たくなつた死体から取り出した臓器は役に立たないそうである。ということからすると臓器はまだ生きていることになる。「ご臨終です」と宣告されてからもだんだんに死んでいくのである。埋葬許可が降りるのは、二十四時間後とされているのはその証左ではなからうか。

臓器移植は新鮮な程よいそうである。遺体から臓器を取り出すのを「ハーベスト（収穫）」というそうである。ハーベストされた臓器は、容器に入れられて、

心臓はどここの大学病院、腎臓はどここの病院、肺は・・・等々、飛行機に積み込まれていくのが放映されていた。こうなるともう完全な「もの」である。脳死の人間の臓器はもつたいないから、他の尊い命を救うために有効に使おう、崇高な論理、科学、合理主義である。ドウダンミン男には異議など唱えられない。ただ拝むだけであるが、心の奥底では違和感を感じ、しつくりしないものがある。うまく言えないが、「人間様そこまでやるか」という空恐ろしささえ感じる。あたかも故障した自動車の部品を取り替えるみたいな感じである。人間が命を持ったものではなく、単なる機械である。

男が中学校で理科を担当しているときに、蛙の解剖実験があつた。蛙に麻酔をかけ、死んだような状態にして、腹を切り開いて内臓を観察するのである。すると心臓が元氣よく動いているのを見て、生徒たちが驚きの感嘆を上げる。終わつたら犠牲になつた蛙を丁寧に埋葬して命の尊さを教えた。

近年凶悪な殺人事件が頻々として起きている。これは、人間機械論に移行してきた社会風潮と無関係ではないようにドウダンミンできる。この崇高な文明の行き着くところは、人間様が求めているのと反対ではないか。そんなに思えてならない。

人間は、誕生日に生まれるのではなくて、受精卵ができたときに生まれ、だん

だん生が完成していく。死も臨終の瞬間が死ではなく、生のピークからだんだん死んでいく。老化は、緩やかな死を意味する。人間の思うに任せない「生、老、病、死」の四苦のうち、老は緩やかな死となる。病の癌は、癌細胞の勝手な増殖であり、肝炎は肝細胞の死滅である。老と病が、生と死に含まれるとなると「生、死」の二苦になる。

人の死は、臨終を迎えた瞬間が死の瞬間ではない。呼吸の間合いが長くなる。血圧が次第に下がる。脈拍が弱くなっていく。臓器によつてはその後も命脈を保ち続ける。

臨終を迎えたその夜は、親族や知人などが寄り集まり通夜を行う。湯浴みをさせてきれいにし、冥土の旅衣を縫い、それを着せる。食事も普段と変わらず家族とともにする。明かりをともし、膝を抱いて夜を明かす。添い寝もする。旅に会わせなければならぬ人がいるときは、帰ってくるまで待つ。生きているとき同様、思い出話をしたり、生前のお礼を言ったり、人々は別れの挨拶をする。幽明界を異にしたからには、迷わずに昇天してくださいと言いつけるとともに、こちらも決別の覚悟を決める。棺桶の中には愛用の品々を入れ、先祖様へのお土産も言付けをして持たせる。そして敬愛の念を込めて遺体を葬る。

与論ではその後普通、遺徳を偲び三日祭、十日祭、二十日祭、三十日祭、五十

日祭、百日祭をする。肉体は死んでも魂は存在しているかの如くである。

月々の命日にはご飯を供え、祥月命日には、ご馳走をお盆に山盛りして備える。一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、二十五年忌、三十三年忌には、親族が集まり祭りをする。三十三年忌祭は最後で、旅にいる子や孫も集まって盛大にする。肉体は死滅しても魂は子々孫々に生き続ける。魂の死は、人々の記憶から完全に消えたときである。

与論ではことあるごとに先祖の前に額ずき、敬愛の念を込めて礼拝する。これは、先祖を生かし続けていく美風だと思う。

人はいつ死ぬか、完全に忘れ去られたときである。

平成十七年十二月記

丙子アグ

旅から同級生が来ると、それをだしに寄り集まって飲む。何かにかこつけた無目的飲みアググループを作っている。その名を生まれ年（昭和十一年）の干支をとり「丙子の会」と名付けてある。

与論中学校に昭和二十四年四月入学、二十七年三月卒業である。敗戦後琉球政府時代だった。校舎は、長屋馬小屋風造りで屋根と壁はスキで、戸はスキで編んだものを下げていた。そうめん箱を机として地べたに坐っていた。食料は自給自足なので、雨が降ると「農繁休暇」となり農作業に従事した。小中学生も立派な労働力だった。家事が忙しくなると休まされる人もいた。卒業名簿に載っているのは百四十三名である。中退者がいたのではないかと思われる。泳ぎの達人なものはアギヤーに行き一人前の稼ぎをする人もいた。

当時赤崎のピシバナ（リーフ）に五千トン級の貨物船が座礁していた。赤いはらわたを斜めに横たわっていた。沖縄に行く途中、イシャ

トウの灯に迷わされ、港と勘違いして座礁したと噂されていた。船員の外人が上陸してきた。話が出来るのは川村景明先生だった。さすが東大（与論出身東大合格第一号）とみんなが舌を巻いた。間もなくその船は無人になった。その船から、ウジュン（魚を突く鉅）にする鋼やゴムをとつてきていた。どうしたことかその後また別の船が同様に座礁した。長い間放置されていたが、後年サルベージ船が来て曳航して行つたと聞いた。学校の行き帰り見えたので覚えていゝる。

中学校卒業後五十五年、それぞれの道にいそしんだ。林勢至は、仕出し弁当の県下一の会社を経営している。有村悦弘は、永年の名誉灯台長の功績により、単光瑞宝章を受章した。与論島に軸足をおき、事業を通して島興しに大きな業績のある者などいゝる。

白髪、皺、姿形はすっかり変わったが、酒酌み交わしながらじつくり話していると、中学生のときと性質とどうか人柄とどうか、その人の心のありようがほとんど変わっていないことに驚くやら、ほつとすゝるやら、丸ごと中学時代にタイムスリップする。塩漬け干し小魚を焼いた芋弁当の貧しい時代だったが、振り返ると懐かしい。ともに過ご

した時代を共有し、気の置けない仲間だけに何を言ってもおとがめなし。終始笑いの洪水である。酒の酔いに懐かしさの酔いが掛け合わされてくるくる舞い上がる。挙げ句は二日酔いは免れない。それでも次また、にこにこ、いそいそ出かけていく。七十路を迎えるいいおっさん達である。

やがて来る七十三歳の歳祝いは、全国の同窓生に呼びかけてやろうと話している。その次の八十五歳の祝いは、生きていてもよぼよぼで集まれないだろうからと。七十三歳に集まった面々が、次の八十五歳までは、何名か欠けていくだろうと思えば切なくなる。

友の酒が五臓六腑に、しんみり染みていく秋の夕暮れである。

平成十七年九月十日記

脳に穴

四十九歳のときの定期健康診断でコレステロール値と血圧が共に高めで、健康度黄信号の警告を受けた。ドウダンミン男は、意に介さず肉類や塩分を控えるどころか好き勝手に食べていた。

男は、赤木名中学校の教頭をしていた。職員会議が終わり、書類を整理しているときに、目まいを感じた。そのまま机にうつ伏した。同僚が周りに集まり「どうしたか」と言っている。はつきり聞こえているが、返事が見つかからず黙っていた。まもなく吐き気がした。誰かが「救急車を呼んだ方がいい」と言い、病院へ運ばれた。まもなく妻が来てベッド脇に立っていた。体が震えていた。医者に「まぶしくて目が開けられない」と言った。目は閉じているのに「天井がぐるぐる回る」、「吐き気がする」と言った。医者は、「吐きたければ吐いていい」と言った。なぜの県立病院へ搬送するための救急車が呼ばれた。

妻は取るものもとりにあえず、一緒に救急車に乗り込んだ。ピーポーピーポー赤木名から名瀬までの遠距離である。沿道の人々に迷惑にな

るなあと思つた。意識ははっきりしている。五十年生きてきて、救急車とは思ひも寄らなかつた。

集中治療室に入れられた。相変わらず天井が回り、船酔いみたいに気分が悪い。妻はベッド脇に立ちつくしていた。後で気付いたのだが、天井から監視カメラが四六時中見張っていた。この先どうなるか見当もつかないし、医者の説明もないので、思い煩うことは不思議となかつた。妻はいたく心配しているようだった。

二日後に、普通病室に移された。トイレに歩いて行くと、揺れる筈のないコンクリートの床が揺れる。平衡感覚がやられたのだろう。それにしても痛さはない。

安積校長先生が度々見舞いに来てくださった。終業後、車で一時間もの道乗りを来てくださるのである。人情が厚くみんなに慕われる親分肌の校長だった。担当医に病状を聞かれたのだろうが、私には伝わってこなかつた。私に関する情報なのに私には伝わってこなかつた。情報をはじく繭（まゆ）の中に閉じこめられた蛹（さなぎ）だった。後で漏れ聞いた話したが、「竹下徹が職場でぶっ倒れて、救急車で運ば

れていったそうだ」そのことは事実だが、いろいろ勝手推測が飛んだようである。当時は職員と管理職の間に「休みの友」などトラブルがあつたから、余計に勘ぐられたものと思う。

ある日、担当医に続いて五・六名の白衣姿の人が来た。担当医が、私の今日に至るまでのことを、緊張した様子で一番前の五十前後の医者（？）に一生懸命説明していた。その医者は私を見ているだけで、一言も発しなかつた。私には一声もなく、またぞろ出て行つた。研究医者を従えた偉いお医者さんの巡回だなど思つた。

七日間入院して退院の運びになり、担当医から説明があつた。「あなたの症状は一過性かも知らないし、度々繰り返されるかもしれない」診断書に書かれている病名は、「脳底動脈循環不全症の疑い」だった。初めて病名を知つたわけだが、「断」ではなく「疑い」だった。何かすつきりしなかつた。今頃だつたらもうちよつと説明責任を求めてもいいような思ひがある。

病室には四名がベッドを並べていた。お互い話しをすることはほとんどなく、私はもっぱら本を読んでいた。退院際に残り三名の目が私

にそそがれた。私は、「こんな所に居るもんじゃない」と言った。その一言を言わなければよかつたと、今でも悔やまれてならない。私自身は病院から抜け出したい一心で、待望のときだったからではあったが。残りの三人には心ない無慈悲な言葉だったに違いない。発した言葉を消す消しゴムがあれば、真つ先に消したい。

退院しても時々地面が揺れるような気がして柱につかまったりした。テレビ見ている画面が左右どちらかに動く気分が悪くなった。二ヶ月後の鹿児島への出張にはまだ不安だったが、断るわけにはいかなかった。助けを求めるところ、気分が治まった。もし声を出していたら、旅先のこととて、大騒動・大迷惑になっていただろうと、胸なで下ろした。「今後、度々起こるかもしれない」という医者言葉が脳裏をよぎった。

五年後那間小に転勤してきた。養護の先生が、沖縄に「MRI」という最新鋭の機械を備えた病院があるから一度検査させた方がよい、とすすめてくれた。そのMRIで撮った写真をみた医者が、深刻な表

情で「ひどく悪い」と言った。大小たくさんの穴が水玉模様になって開いていた。説明を聞いて私も唾然となった。もう一度来るように言われたが行かずじまいである。脳外科が専門の弟に聞いたら、「それだけの写真で分かるはずはないが」と言った。その言葉が全てをひっくり返した。その一言を杖に、ドウダンミン、ドウ診断をして生きていく。木登り、高所、ブランコなどは今も恐怖である。自分自身の不養生の報いである。生意気な性格がもたらした病気である。血圧も高い。一時喘息もひどかった。これについては、古川先生が「仕事を辞めれば治るよ」とおっしゃったが、その通りになった。仕事のストレスが引き金だった。

一病息災。病気がドウダンミン男の生意気を押さえ込み、生き続けさせるつかい棒になつてゐる。「病気を友として生きる」といったら、悟つた風で笑つちやう。

平成十六年九月記

プリムヌ

「プリムヌ」とは、氣違ひ、氣狂ひ、馬鹿者を意味する与論語である。「あの子に惚れて」と言うときに「あの子にプリテイ」と言い「惚れ込む」という意味もある。プリムヌには、どこか愛嬌がある。

ドウダンミン男は、自他共に許す碁プリムヌである。大学の寮生活時代に覚えて以来の病みつきである。その度合ひは、プリムヌを遙かに超えた重度の氣狂ひである。碁打ちは親の死に目にも会わない、と言われる。与論校区のある碁打ちが、茶花で碁を打っていたところに自宅からの使いが来て「親が死んだ」と告げた。それを聞いた碁打ちは「死んだか、死んだか」と言いながら打ち続けたという話が残っている。碁には「石が死ぬ」という表現がある。「親が死んだ」というのを「石が死んだ」と取り違えている嘘のような話である。「碁打ちになつたらいかん」という男への警告で聞かされた。

父は初段ほどの腕前だった。男は、腕を上げ自信を持って父に挑ん

だ。見事に打ち負かされた。父が碁を打つのはそれつきりだった。

叔父二人も碁を打った。徳沢叔父は、それこそ碁キチだった。酒、たばこ、日用雑貨の小売業をしていたが、碁を打っているときは夢中になり、お客さんの言うことを聞かず、あきれ果てられていた。「あの時はお客さんにいくら品物を取られたか分からない」と今も話す人がある。奥さんに碁盤を取り上げられたり、本人も止める決心をして碁盤を打ち割ったこともあったが、晩年やはり打っていた。徹夜で打つこともあり、男もしばしば相手になった。「ヲウジ―又ム又又（叔父と甥とも）」と罵倒されたこともあった。

徳里叔父は、東京でアマチュア五段と言っていたが、男にはかなわなかった。父の兄弟三名より強かったことが、男の唯一の自慢だった。しかしそのために、どれだけ人生をロス（損失）したか計り知れない。男が碁に費やした時間を勉強に当てていたら……。過去に「もし」はないが、それでももしほかの有益なものに振り向けていたら……。今でも悔恨は深い。なのに七十路になっても止められないのは、「プリムヌ」の惚れた部分が多分にあるからに違いない。「惚れる」は、理屈

でも、錢、金でもない。

ある時、与論中学校の宿直室で碁を打っていた。相手の先生の奥さんが子どもをおんぶして迎えに来た。碁の決着がついていないのでそわそわしながらも席を立たなかつた。それからもの数分もたたないうち、奥さんは業を煮やしたのであるう、子どもをつまんで泣かした。

周りの者はたえかねて中断させ、先生をせき立てた。それ以後その奥さんが来たら、即座に中断して先生を追い返すようにした。また、ある先生を、じいさんが孫をおんぶして迎えに来る場合もあり、気の毒だった。碁打ちは相手の家庭のブレーカー（打ち壊す人）でもある。私は、母に打っている途中の碁盤をひっくり返されたこともある。日曜日のテレビ囲碁はよほどのことがない限り欠かさず見た。親戚にキビカサギを手伝ってもらっていた日も見ていたら「徹がいらないと言っている」と父が飛んできてテレビのスイッチを切った。

碁には人柄が表れる。打っていて気持ちのいい人、よくない人とある。力が拮抗し、白黒を取り合う相手だったら言うことはない。男に四十数年来の好敵手・K先輩がいる。鹿児島に出張のときは、そのお

宅に寝泊まりして打つ。深夜まで打ち、翌朝、朝飯までまた打つ。男は、人生の至福を感じる。引き替えに、奥さんと子ども達はいい迷惑である。碁打ちは罪作り人である。

碁にも功罪がある。プリムヌにならずに普通に打つなら功の方が大きい。学校のクラブ活動に結構取り上げられている。思考力養成に役立つ、知的ゲームとして普及しつつある。小、中、高校生の全国大会もある。老若男女を問わずにできる。棋力に差のある場合はハンディを付けると対等に戦える。碁は「知の格闘技」と言ったゴジンがいた。言い得ている。

歴史的には、武将達のたしなみにもなったといわれる。織田信長、豊臣秀吉も碁を愛し、相当の腕前であったと伝えられている。西郷隆盛も西南戦争の最後が近づいた頃、城山の洞窟で碁を打っていたという。戦場を駆けめぐる武将達にとって碁は心の静寂を取り戻すのに適していたのだろう。

囲碁五得

得好友↓よき友を得る

得人和↓人々が融和する

得教訓↓教え訓えられることが多い

得心悟↓悟りを開く

得天寿↓天寿を全うできる。

碁を打っているとは煩雑を離れ、しばし無心になれる。勝った喜び、負けた悔しさ、窮地の苦しみがある。手を読む難しさ、緊張と興奮の盤上にはロマンがある。脳を活性化させ老化防止になると言う。ドウダンミン男はこれを格好の口実にして打ち続けていくであろう。

平成十七年十月記

災

昔（昭和二十年以前）、増木名池があつた。大雨のあと水を満満とたたえ、奥の方はアダンやウシクが鬱蒼（うつそう）と茂り、その根元付近は深く、青黒い色をしていた。池の底にはジャー（恐竜）が住んでいると恐れられた。その昔、七箇月間日照りが続き、七箇月間雨が続いたとき、困つたのは雨続きの方で、燃やすものがなくなり、家の壁にしてある萱や竹まで燃やしたという。増木名池だつたところは、排水溝が整備され今では肥沃な一等畑地に変わり、昔の面影はない。

平成十六年の代表文字は、「災」である。豪雨水害、新潟中越地震とまさに災害の多い年だつた。それに比べると「ワーチャガ 台風、ナゴ、ヌーチャー イヤンバンヌイヤー（あの災害に比べると私たちの台風災害などをとやかく言つてはいけないな）」、と与論の人口に膾炙（かいしや）していた。

「災」の「火」の上の「ㇿ」は、川がふさがり、あふれる災いを表す。平成十六年の暮れには、スマトラ島沖地震、津波大災害が起き、「災」

が駄目押しされた。死者・行方不明者は三十万人超。一ヶ月後の現在でも確たる数は把握できていない。テレビの映像で見る限り、十層もの高さの津波が押し寄せる様は、この世のこととは思えなかった。ところによつては、波の高さが三十層に達したところもあったという。「つなみ」という日本語が、世界共通語ということも初めて知った。

昭和三十八年だったか、南米のチリ沖地震で津波が発生し、日本まで押し寄せてきた。名瀬市の真ん中の公園で、ドウダンミン男は津波に乗つてやつてきた魚を捕まえ、津波の偉大さを経験した。その偉大さとは、何千キロもある太平洋を一またぎして来たこと、そして伝わる速さの速いこと。

平成七年一月十七日（今から丁度十年前）に発生した阪神淡路大震災は、六四三三人の死者が出る大災害だった。犠牲者は与論出身者にもいた。道路通信網が寸断、火事があつちこつちで発生、ライフラインが断ち切られた。村山内閣は自衛隊の出勤要請をためらい、対応も鈍く、その遅れが被害を大きくしたと報じられた。民間のボランティア活動が多かったと聞く。外国からもあつた。

スマトラ島沖の津波犠牲者の半分は子どもだったという。生き残った子どもの中には両親を亡くした子どもがいる。その子どもを引き取り、売り飛ばす奴がいるという。また驚きである。仏面鬼心である。伝染病の流行も怖い。天災に人災が続く。「災」は常に弱い者に襲いかかる。

怖いもの「地震雷火事親父」といわれたが、これは「地震雷火事津波」と改めた方がいいように思える。現代の親父は失格。

与論の先人の戒めに「天は落ちると思え、地面は落ちると思え」というのがあるが、まさにその通りである。「天が落ちる」とは雷のことであるし、「地面が落ちる」とは地震のことであり、海底が落ちてできる津波のことである。人知を超えた自然災害の恐ろしさを言い得た叡智である。

天災は、人間の知・能力が足りないから致し方ないとしても、人災は何とも悲しい。

平成十七年一月十七日記

バランスの神様

平成十七年の七月から八月にかけて、与論島では雨が降っていない。春植サトウキビへ灌水のため、トラックが水タンクを積み、ひっきりなしに運んでいる。菅原池、叶池など貯水池は汲み干してしまった。ボーリング取水口には順番待ちの車が並ぶ。梅雨には記録的な大雨が降ったのに、サトウキビの成長最盛期に降らない。時期を分けて均衡に降ってくればと民は嘆く。本土には災害をもたらす大雨である。場所を分けて均衡に降ってくればとまた嘆く。

赤がれた上に、バッタの被害まで加わる。弱り目に祟り目である。与論島は外海の小さな島で、山も川もない。そのため毎年大なり小なりの干ばつがある。宿命的なものである。だがしかし、一昔前飲料水に不自由していたのが、今は水道からジャブジャブ出ることを考えると、農業用水も不自由しない施設ができないものか。是非なつて欲しいものである。地球全体として降る雨の量は同じでも、場所によっては水害の所有り、干害の所有り、ママならぬ。

近年子牛生産がとみに伸びてきた。今年（平成十七年）の生産高は八億円にもなったという。干ばつは牛の餌となる草にも大被害である。草が伸びないし枯れてしまう。それをビーバーで刈ると風に飛ばされていく始末である。水確保が大きな課題である。

中近東の砂漠地帯から来た人に、「お土産に何が欲しいか」と聞いたら「ひねると水が出る蛇口が欲しい」と答えた、という半ば笑い話がある。

修行中の若い坊さんが、朝、顔を洗った残りの水を無造作に捨てた。それを見かけた師の坊さんが、「その水は花に掛ければ生きるのになぜ捨てる」と一喝した。一滴の水が集まり、川となり、湖となり、大海となる。一滴の水が植物や動物の命を支える。一滴の水の命、大切さを思わずして、（何が修行だ）と。若い坊さんは、これで悟り、「滴水」と名乗り、偉いお坊さんになった。

喜界島には大型地下ダムが、国営で設置された。沖永良部島でも地下ダム設置計画があると聞いた。与論島も降った雨を海に流すのではなく、溜めて渇水期に使えるようにしなければ、「雨タボーリ」だけで

はお天道様も愛想つかすのではないか。「天は自ら助くる者を助く」
与論島の農畜産業発展のために、給水の社会資本整備が欠かせない。
毎年やってくる干ばつ、これは常襲的災害である。その災害対策とし
て、ひねれば回るスプリンクラーが畑ごとにいる。

水資源確保のため、当面実現可能な方策の第一は雨水を溜める。第
二は地下水を汲み上げる。第三は生活雑排水を灌漑（かんがい）用水
に再利用する等がある。次世代には海水の淡水化が考えられる。

宇宙旅行が取りざたされ、その旅券が百十億円で売り出された。そ
の話題性はいいとしても、足下の水不足の解決はできないものか。宇
宙旅行へ行く人は、天の神様に時期と場所をバランス良く雨を降らせ
るように、お願いしてきてくれないだろうか。よろしくお願い申し上
げます。
（平成十七年八月二十三日）

ユーティーチ

京都議定書が発効されようとしている。

二酸化炭素の排出量を規制しようとする地球温暖化防止対策の環境である。こともあろうに、二酸化炭素の排出量がずば抜けて多いアメリカがこれに反対している。得手勝手、横暴きわまりない。地球の大気は一つ、みんなのもの、地球は病んでいる、ということがわからんのか。ドウダンミン男は、腹が立つ。一番強くて手が付けられない国だから余計である。

地球の環境問題は、人類だけではなく生きとし生けるものの全地球共通の問題であるが、認識の相違や利害関係が絡み、なかなか共同歩調がとれない。

一、まだまだ大丈夫と見るか、危ないと見るか。

〔問題〕 池に水草が浮いている。この水草は一日に二倍に増え、毎日二倍に増えていくとして、一年で水面いっぱいになるとする。半分に達した。あと何日でいっぱいになるか。

いかがでしようか。コロンブスの卵同様で、言われてみると答えは簡単、後一日である。三百六十四日かかって半分になり、後わずか一日で満杯である。

バランスを保っている天秤棒の一方に重りをもう一つ乗せると、がたんと崩れてしまうことと似ていはしないかとドウダンミンされる。

二、自然に対する見方考え方である。

・ 欧米人は、自然は征服するもので、人間のためにあると見る。
・ 日本人は、太陽や月を神と崇める。大木、石、森、山、海、地面にも神が宿ると見て崇める。

三、産業振興への利害関係が絡む。

アメリカが「京都議定書」に反対している主な理由は、産業への打撃に配慮したものである。

ドイツ地方を中心として酸性雨による大規模な森林枯渇があった。二酸化炭素を吸収し、酸素を輩出してくれる森林を伐採しているのは主に先進工業国である。酸素を消費し、二酸化炭素を出

しているのは先進工業国である。二重三重にパンチを浴びせている。その度合いは、先進度に比例する。

先進工業国は、環境浄化へ向けて大きく舵を切る時である。さもなければ、人類が人類を滅ぼすことになる。生きとし生けるもの全てを巻き添えにして。

中国の故事からきた「杞憂」という言葉がある。杞の国の人々が、天が落ちてきはしないかと心配した、という話から出たもので、ありもしないことを心配することに遣われる。しかし、地球環境問題は、杞憂ではなくなった。

与論の風花の地でドイツ製の巨大風車が回っている。クリーンエネルギーの先端を担って回っている。

風車よ 回れ 回れ

回り回って電気を起こせ

回り回って環境《気》を起こせ

風車よ 回れ 回れ

時代にさきがけて回れ

与論から世界へ回れ

この風車は子どもたちの環境教育の教材でもある。

スマトラ島沖の津波で日本人も犠牲になった。いまや世界のどこかで大砲が一発発射されると、その弾は各国にあたり、株価が乱高下する。当地への観光客のキャンセルが相次ぐ。原油の値段が上がり、竹下石油のガソリンも上がる。世界はユーティチだ。

子孫に地球を残すために何が必要か。それは「抑制」だと思う。人間の欲望の抑制。それ以外にないとドウダンミンした。人類の欲望を抑制する神様、仏様、絶対の神様が、今世紀中に現れてくれないだらうか。ああ宇宙を造りし神よ、地球をお救いあれ

平成十七年七月記

因果応報

昨日は今日の物語、今日は明日の物語。善因善果、悪因悪果。この世で善行を積み極楽に行け、悪いことをすれば地獄に落ちる。因果応報は、佛教用語で、過去における善悪の業に依じて現在における果報を生じ、現在の業に依じて未来の果報を生じること。

遠い昔、悪いことをすると神様がみていて、あの世では地獄に落とされる。地獄はそれはそれは恐ろしいところだ、と聞かされ、子供心に染めた。悪いことをすると巡査が来て耳を切る。泣いたら護佐丸が来てさらっていく、言うことを聞かないと糸満に売るぞ。子どもをしつけるためにつかわれた文言である。

今年アメリカ南部のルイジアナ州を超大型ハリケーンが二度もおそった。死者数千人を出し、石油施設が被災した。海拔0坪という土地の悪条件に、地球温暖化による海水温度の上昇が重なって、未曾有の被害がもたらされたと言われている。

地球温暖化防止のための京都議定書に調印していないアメリカ、し

かも原因とされる二酸化炭素の排出量が一番多いのも、誰あろうアメリカである。因果応報がドウダンミン男の頭をよぎった。治水に対する備えも甘かったのではないか。天災というより人間の浅知恵が憂えられる。

当地（ルイジアナ州）の石油施設が壊滅したので原油が高騰した。そのため与論の石油の値段も上がった。原油の高騰は、ガソリン、軽油等の値段を直接上げるばかりでなく、船運賃も押し上げる。輸送費が上がれば品物の値段も上がる。ルイジアナに吹いたハリケーンは与論の台所も直撃である。今や地球は、環境も経済も一つである。一部の地域の「因」によって地球全体が「果」を被る世の中になった。これも人間の手によってもたらされた文明の因果である。

平成十七年十月記

国の気概

平成十五年北朝鮮が拉致を認めて、五名を日本に返した。その前には北朝鮮の工作船が、奄美沖で日本の警備艇と銃撃戦を行い、中国の排他的経済水域まで逃げていき、自爆沈没した。

世界地図の中に「日本海」が表示されている。国際的に認められている日本海を、隣の国が名称変更しなさいとイチヤモンを付けてきた。笑止千万。

我が国の領土「竹島」に韓国が領土権を主張している。わざわざ人を住まわせたり、郵便切手の絵柄にして誇示している。

尖閣諸島の魚釣り島も日本固有の領土なのに、中国が触手を伸ばしてきた。台湾も領有権に口を出している。その島の大陸棚には、油田があると推測されている。たとえば島は小さな岩だけであってもその周囲二百海里以内の漁業資源、地下資源などがあり、おろそかにできない。中国は周辺の海底資源の調査をしたり、活動家が上陸して中国の旗を立てたりした。このときはさすがに日本も出動して

逮捕した。しかしながら日本政府は事を荒立てたくないとして送還した。日本政府のへつぴり腰と相手がなめていることを思い、ドウダンミン男は腹立たしかつた。市来頼利（朝戸出身、鉾山採掘家）さんはかつてその島に渡り鉾石探索をした。その島の持ち主から島ごと買わないかとも言われたとか。その持ち主は現在東京に引越された。

太平洋戦争の終戦八日前まで、日本とソ連は日ソ不可侵条約を結んでいた。ソ連は国境に軍隊を集結させ、条約が切れると同時に日本に宣戦布告をして怒濤（どとう）の如く侵攻してきた。日本が無条件降伏をした後九日間も侵攻し続けた。そして現在、北方四島（国後、択捉、歯舞、色丹）を不法占拠し続けている。国後島は沖繩本島よりも大きく、四島合わせると沖繩島の二倍以上の面積がある。

満州盤山に、開拓団として与論から多数入植していた。その方々は、ソ連兵に追われ、満人に追われ、なかには殺された人、自ら命を絶った人もいて、それは生き地獄そのものだったという。そのことは「与論島移住史」南日本新聞社編に詳しく載っている。

田中真紀子外務大臣が辞め、鈴木宗男衆議院議員及びその子分だった外務官僚の佐藤が逮捕されて外務省内部の不祥事・ていたらくぶりが明るみに出た。齒舞色丹の二島先行返還論は、佐藤優著「国家の畏」の本に詳しく述べられている。とんでもないことである。世の中には、自分の利権のために領土をも売りかねない人もいるものだと、男は恐ろしくなった。

内閣総理大臣が靖国神社を参拝することについて、韓国や中国から抗議、圧力、制裁等がある。相手国の理由は、A級戦犯を祭つてあるからだという。

そもそもA級戦犯というのは、戦勝国の連合国側が敗者である日本国を裁くためにやった、東京裁判で決まったものである。勝者が勝者だけの論理で一方向的に決めつけ、東条英機ほか六名が絞首刑になった。

国のために命を捧げた幾百万の兵士の御霊も祭られている。日本

の国のために命なげうった人々のために、日本国の代表が参拝することがなぜ悪いのか。ドウダンミン男には分からない。

中国や韓国 of 非難攻撃に対して日本はおっかなびつくりな対応である。「内政干渉だ、関係ない」、他国の容喙（ようかい、口出し）は許さないとなぜ毅然としてはねつけないのか。さらに分からないのは、日本の大手マスコミや文化人と言われる方々までも参拝を非難する。草葉の陰から「それはないよ」という声が聞こえる。

教科書の記述内容が悪いと文句を付けてくる。それにまた頭を下げる。おい！おい！、日本の国よ！いったいぜんたいどうなっているんだ。それで独立国家と言えるのか。憲法を改正して自衛・国防の気概を明記すべきである。子や孫のために旗幟鮮明にしておく。

平成十七年五月記

横文字氾濫 (はんらん)

竹下商店でたばこを売っている。主な名前は次の通りである。

MILDSEVEN original' MILDSEVEN lights'
MILDSEVEN super lights' MILDSEVEN extra
lights' MILDSEVEN one' MILDSEVEN FK
MILDSEVEN menthol' MILDSEVEN one BOX、
CASTER mild' CASTER one、SEVENSTARS、
FRONTIER、MARLBORO、ECHO、HOPE 以上
のように全部英語表記である。どこの国のたばこで、どこの国のど
なたに売るためでしょうか。一昔前は、新生、若葉、いこい、等日
本語表記だった。

ビールは、日本語も混じり次のような表示がある。麒麟、淡麗、
一番搾り、生搾り、鮮快生、KIRIN、ASAHI、DRY、D
iet、Draft One、Orion

国鉄は民営化になったら「JR」になった。JAL (日本航空)、

J A (農協)、J T (日本たばこ) など「J」のつくのは「Japan」の頭文字を取ったものである。オリンピック選手のゼッケンに「JAPAN」と付けているものと「NIPPON」と付けているものがある。「Japan」は、英語圏の人が日本を指していったもので、日本の国名は「日本」である。何故、堂々と「日本」と言わないのか。日本人が、「Japan」というのは、欧米に対し、こびへつらっているように思えて情けなくなる。まして日本国内で日本人向けに日本人がつかうなどとは「金玉あるのかい」とドウダンミン男は言いたい。「NHK」は、日本放送協会の頭文字を取ったものである。すつかりならされてと言うか、なれてしまったが??? 米英の「BBC放送」とか「NBC放送」とかをまねたようだが、「J」を付けてないだけかもしれません。日本語の名前で欲しかった。

今や、カタカナや横文字の横行は目に余るものがある。カタカナ辞典がなければ分からない。いや、市販のカタカナ辞典にも載っていないものの方が多い。ドウダンミン男はいやになる。特に行政機関が町民や県民向けに出す文書がそうだといささか腹が立つてくる。

カタカナを多用するのは、欧米を尊崇し、自分たちの日本を見下している。「いや、そんなつもりはない」とか「おまえももつと勉強せよ」という声があるようにドウダンミン男には思えてならない。底には多少それがあるようにドウダンミン男には思えてならない。明治の初期に欧米列国の富と文化に衝撃を受け、さらには太平洋戦争で打ちのめされ、アメリカ占領軍によって日本の伝統文化が根こそぎ否定されたのが一大要因に思える。

英語を嫌って言っているのではない。英語やカタカナを使つてはいけないと言っているのでも決してない。むしろより多くの人々が使いこなしてもらいたい。必要もないところを使つたり、自分が知っているからといってやたらと使ってもらつたらはた迷惑。英語の国が偉いのもその人が優れているのでもない。かといって日本人が優れていると言おうとしているのでもない。

言いたいのは、卑下しすぎではないか、もつと自主独立の気概と誇りを持って！、あなたの国は？と外国人からきかれたら「日本」と言え、と。

こんなことを言うと「犬の遠吠えだ」、「蠟螂の斧（とうろうのおの・カマキリのかま）」だとあざけ笑われるのがオチである。
若者を中心にこのカタカナ文化の風潮は進行していくだろうことを思い、ドウダンミン男のやるせなさがつものつていく。

平成十七年盛夏

N I P O N